

新型コロナウイルス感染症関連での食肉業界の販売動向等

コロナ禍の食肉をめぐる状況

公益財団法人日本食肉流通センター

情 報 部

2021年5月

「コロナ禍の食肉をめぐる状況」目次

	ページ
1 食肉の「セット」価格等の動向	1
1-1 首都圏における牛肉の価格動向	
(1) 首都圏における牛肉の部分肉セット価格（重量中央値）の動向について	
(2) 東京市場における牛枝肉品種別規格別枝肉価格の推移について	2
(3) セット価格の動向と枝肉価格の動向の比較	3
(考察1) なぜ、セット価格への影響が 「交雑」の方が「和牛」より大きかったのか。	4
2 部位別価格の動向	5
2-1 牛肉における品種別・部位別価格の推移	
(1) 和牛チルド「4」の部位別価格の推移	
(2) 交雑牛チルド「3」の部位別価格の推移	6
(3) 乳牛チルド「2」の部位別価格の推移	7
(4) まとめ	9
(考察2) 「ロイン」価格の動向が、「和牛」と「交雑」でなぜ違い、 年次ベースでの減少率がほぼ同じであったのか？	10
(考察3) 年末に、軒並み価格が回復したのはなぜか？	
2-2 首都圏における豚肉の価格動向	11
3 食肉の消費、外食系が減少、内食系が増加	13
3-1 食肉卸売業者の主な販売先での売上動向について	
3-2 「家計調査」からみた食肉の消費動向	16
(1) 消費支出全体について	
(2) 「家計」による家庭内、外食の区別から見た食肉の消費動向について	
(3) 食肉への消費支出の動向について	18
(考察4) 家計消費での牛・豚肉の購入単価上昇の分析	19
4 食肉の需給動向について	20
4-1 牛肉の推定出回り量（流通量）について	
4-2 2020年における牛肉の輸入及び輸出について	21
(1) 牛肉輸入の数量及び単価について	
① 冷蔵ロイン	
② 冷蔵ロイン以外	
③ 冷凍ロイン	
④ 冷凍ロイン以外	
(2) 牛肉輸出の数量及び単価について	25
① 冷蔵ロイン	
② 冷蔵ロイン以外	
③ 冷凍ロイン	
④ 冷凍ロイン以外	
4-3 豚肉の推定出回り量（流通量）について	30
4-4 豚肉の輸入数量及び単価について	31
参 考 訪日外客数と国産牛肉価格との関連の分析	33
1 牛部分肉セット価格と訪日外客数について	
2 訪日外国人の訪日旅行に対する意識調査について	35

コロナ禍の食肉をめぐる状況

公益財団法人日本食肉流通センター

当センターでは、新型コロナウイルス感染症関連で、国産食肉の部分肉価格及び食肉業界をめぐる状況等について、2020年に8月と12月に、ホームページで公表してきました。

今回、当センターが公表している首都圏での部分肉取引情報及び総務省や食肉消費に関連する団体等が公表している統計資料等を分析するとともに、2021年4月に当センター公表委員等に対し聴き取りを行い、以下のとおりとりまとめました。

1 食肉の「セット」価格等の動向

当センターが公表している首都圏での国産の牛肉の部分肉価格（月次価格等：消費税込）が、これまでのコロナ禍でどのように推移したかを分析しました。

1-1 首都圏における牛肉の価格動向

(1) 首都圏における牛肉の部分肉セット価格（重量中央値）の動向について

ここでは、当センターが公表している牛肉品種規格、和牛チルド「4」（以降、「和牛」という。）、交雑牛チルド「3」（以降、「交雑」という。）及び乳牛チルド「2」（以降、「乳牛」という。）について、部分肉「セット」価格の動向を比較しました。

図1-1 首都圏：牛肉の品種別部分肉「セット」月次価格（重量中央値）の推移

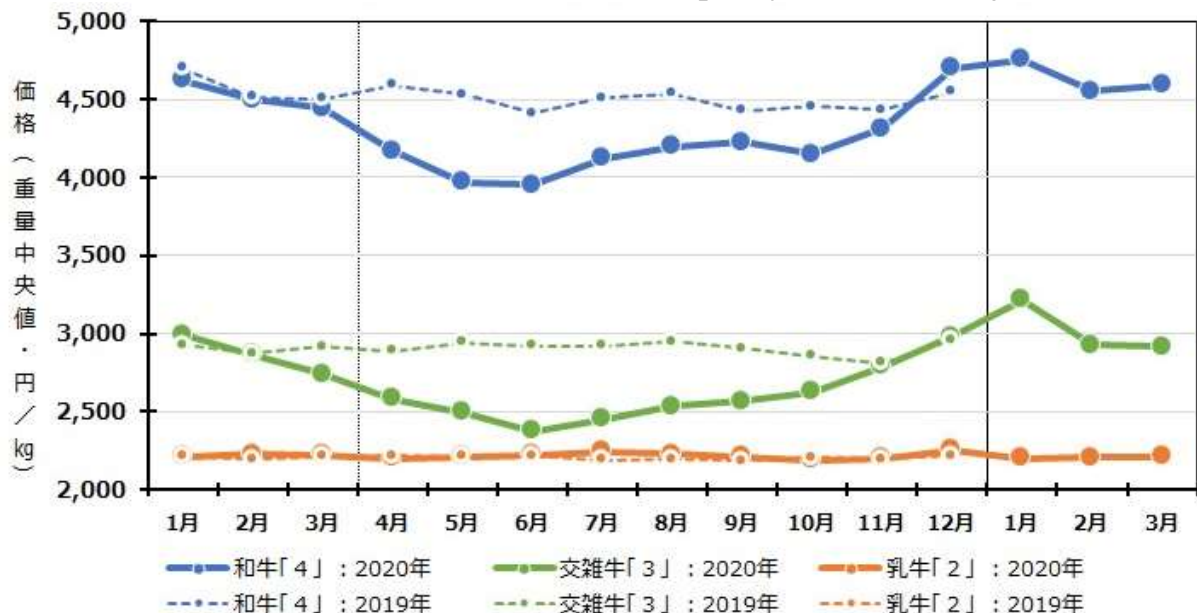


図1-1より、「和牛」及び「交雑」の月次価格は、両者とも、2020年6月に最安値を付けた後、徐々に回復しており、12月には2019年を超えるほどに価格を戻し、2021年の3月まで前年を超えて推移しています。一方、「乳牛」は、年間を通じ大きな変動もなく推移し、今年に入っても同じ状況が続いています。

なお、「和牛」及び「交雑」の部分肉セット価格が、枝肉価格より概ね1カ月遅れて連動する傾向は、コロナ禍でも継続していました。（下記（2）表1、参照）

図1-2 首都圏：牛の品種別部分肉「セット」における年次価格の推移



畜種 \ 年	2019年	2020年	前年比
和牛「4」	4,524	4,307	- 4.8 %
交雑牛「3」	2,916	2,691	- 7.7 %
乳牛「2」	2,204	2,216	+ 0.5 %

（単位：円/kg，%）

年次ベースでみた場合、2020年は、前年比で「交雑」が約8%、「和牛」が約5%値を下げていますが、「乳牛」はほぼ変動がありませんでした。

このことから、コロナ禍の影響が多かった牛肉の品種は、「交雑」、「和牛」であり、逆に、「乳牛」は影響が少なかったと判断されます。

（2）東京市場における牛枝肉品種別規格別枝肉価格の推移について

以下の表には、農林水産省が公表している「食肉流通統計」より、2020年1月から2021年3月までの東京市場における主要な牛品種の去勢規格についての枝肉卸売価格（税込）を抜粋し、以下の表にまとめました。

表1 東京市場における枝肉の規格別卸売価格

品 種		和牛去勢						交雑牛去勢				乳牛去勢		
格付規格		A-5		A-4		A-3		B-3		B-2		B-2		
項 目		価 格	前年比	価 格	前年比	価 格	前年比	価 格	前年比	価 格	前年比	価 格	前年比	
年	月	(円/kg)	(%)	(円/kg)	(%)	(円/kg)	(%)	(円/kg)	(%)	(円/kg)	(%)	(円/kg)	(%)	
2020年	1	2,681	95.6	2,274	91.0	2,018	87.8	1,605	99.3	1,474	98.5	977	95.4	
	2	2,576	92.3	2,116	85.3	1,887	82.9	1,501	91.4	1,320	84.8	971	95.7	
	3	2,314	83.4	1,846	75.0	1,651	73.2	1,323	82.5	1,119	75.1	958	92.4	
	4	2,027	73.9	1,688	70.0	1,512	67.6	1,189	72.9	1,031	68.2	863	81.0	
	5	2,201	81.2	1,817	75.4	1,610	73.1	1,256	76.4	1,130	73.0	983	92.9	
	6	2,256	82.6	1,860	77.2	1,648	74.6	1,182	72.6	1,037	68.0	947	90.1	
	7	2,369	87.0	2,021	84.2	1,812	82.8	1,308	80.0	1,138	75.0	917	90.3	
	8	2,379	89.8	2,039	86.6	1,829	84.7	1,382	83.5	1,226	81.1	887	87.0	
	9	2,416	88.7	2,079	86.3	1,888	86.9	1,315	81.6	1,140	77.2	827	84.6	
	10	2,634	99.1	2,332	98.7	2,131	98.5	1,414	89.7	1,255	87.3	868	87.1	
	11	2,738	99.2	2,495	103.4	2,288	106.4	1,594	99.6	1,453	101.0	955	97.4	
	12	2,872	105.6	2,626	114.8	2,357	118.0	1,675	100.9	1,481	101.2	927	97.2	
	2021年	1	2,664	99.4	2,428	106.8	2,260	112.0	1,575	98.1	1,424	96.6	991	101.4
		2	2,679	104.0	2,430	114.8	2,207	117.0	1,484	98.9	1,339	101.4	948	97.6
		3	2,802	121.1	2,599	140.8	2,411	146.0	1,610	121.7	1,475	131.8	995	103.9
年度平均		2,503	93.9	2,201	95.4	1,996	95.7	1,415	89.0	1,261	87.2	926	92.4	

資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）

注1：消費税を含む。

注2：直近3月は速報値である。

・和牛去勢の枝肉価格は、格付のA－5・A－4・A－3規格とも、4月を底として徐々に回復し、11月には概ね前年並みになりました。2019年の12月の価格が11月より安い異常年であったことありますが、2020年12月の価格は3規格とも前年比プラスとなり、A－3で18%高、A－4で15%高、A－5で6%高となりました。2021年3月には前年比で、A－5が21%高、A－4が41%高、A－3が46%高となっています。

・交雑牛去勢の枝肉価格は、格付のB－3・B－2規格とも、4月から6月を底として徐々に回復し、概ね11月に前年並みとなり、2021年3月には、前年比でB－3が22%高、B－2が32%高となっています。

・乳牛去勢B－2規格の枝肉価格は、和牛去勢及び交雑去勢ほど、下落率は大きくありませんでしたし、価格の戻りも緩やかです。

欧米でのコロナ禍では、と畜場や食肉加工処理場での作業員の陽性者の発生により、操業停止になり、食肉の価格が短期的に急変動した事例がありましたが、日本ではそのようなことはありませんでした。

なお、枝肉価格の価格低下率に比べ、部分肉セット価格及びロイン以外の部位別価格の低下率が小さくなるのは、枝肉を加工処理して部分肉に加工したり、部分肉を輸送したりするコストには、枝肉相場とは連動しないで近年上昇傾向にある人件費が含まれ、それらが枝肉価格に上乗せされて、セットや各部位の価格が形成されるためです。

(3) セット価格の動向と枝肉価格の動向の比較

セット価格の動向を牛肉の品種別に比較しますと、コロナ禍で負の影響を多く受けたのが「交雑」、「和牛」であり、影響が少なかったのが「乳牛」です。

ここで、2020年次の枝肉価格をみた場合、和牛去勢「A－3」では10月まで、交雑牛去勢「B－3」では11月まで、乳牛去勢「B－2」では年間を通じ、価格は前年を下回っており、全ての品種でコロナ禍に価格が下がりました。

乳牛去勢「B－2」の枝肉価格が下がっているのにもかかわらず、「乳牛」がセット価格を維持した要因は、枝肉から部分肉に加工する人件費及び必要資材費等諸経費並びに運送費が上昇し、枝肉価格に上乗せされた結果、単価の安い枝肉価格の下落分が相殺されたと考えられます。なお、上乗せ経費は、品種や肉の単価に関係なく、枝肉キロ当たりの作業単価や部分肉キロ当たりの運送費が適用されることが通常であるため、単価の高い「和牛」や「交雑」では、枝肉価格の下落分を相殺できなかったのです。

2020年6月からの回復状況についてみると、「和牛」では、年末の12月まで順調に上昇してきました。

しかし、「交雑」では、前年比でみる価格の回復は、「和牛」に比べ緩やかでした。

(考察1) なぜ、セット価格への影響が「交雑」の方が「和牛」より大きかったのか。

生産量が微増傾向であった中で、インバウンドの激減及び外食機会の減少により、「和牛」セット価格の大きな下落が2020年4月に始まりました。

政府のコロナ対策の一環として、価格が下落した牛肉に対し、「和牛保管在庫支援緊急対策事業」及び「国産農林水産物等販売促進緊急対策事業」等によって

- ① 和牛の冷凍保管経費及び新たな販売取組を支援する対策
- ② 小売業者への納入価格を仕入れ価格より安く販売できる対策
- ③ ネット販売、通販、ふるさと納税での利用を促進する対策
- ④ 新規に学校給食等に和牛肉や交雑牛肉を提供する対策

が講じられました。

量販店では、「和牛」価格が下落した4・5月期は、期間限定の特売を実施したり、9月以降は上記②の対策を活用した「和牛肉」の特売を行ったりした店舗が多くみられました。「交雑肉」より販売数量の多い「和牛肉」の特売の方が宣伝効果が高いと判断したのでしょう。②の対策を活用すると牛枝肉相場が上昇しても、補助金を活用すれば安く販売できたため、年末の牛肉需要期に向け、価格の上昇傾向が継続したのだろうとかんがえられます。

③のうち、ふるさと納税では、関係サイトをみると、「和牛肉」の数が「交雑肉」に比べて多いです。

④給食費の制約がある中で、和牛肉や交雑牛肉等を使用した牛丼等が肉牛生産地等の多くの学校給食で提供されました。

また、6月以降、「和牛肉」が大部分を占める輸出が、数量ベースで前年比で増加に転じ、その後、増加傾向が継続しました。

以上のことから、「和牛肉」の方が「交雑肉」に比べ価格の回復が早く、年次ベースでの価格下落率が小さかったのだろうと推察します。

ただ、外国人観光客数、国内の外食機会・観光が以前の水準に戻り、単価の高い牛肉への需要が回復するには、まだ時間を要するため、上記のような事業がなくなれば、牛肉の相場が今年のゴールデンウィーク後に下落することを懸念する食肉卸売業者が複数いました。

2 部位別価格の動向

2-1 牛肉における品種別・部位別価格の推移

ここでは、1-1で取り上げた牛肉の3品種について、部位別に価格の推移を分析しました。今回、「セット」より高価格の「ロイン」、「セット」より低価格の「ももセット」及び12月の季節変動が特徴である「かたロース」の3部位について、価格動向を分析しました。

(1) 和牛チルド「4」の部位別価格の推移

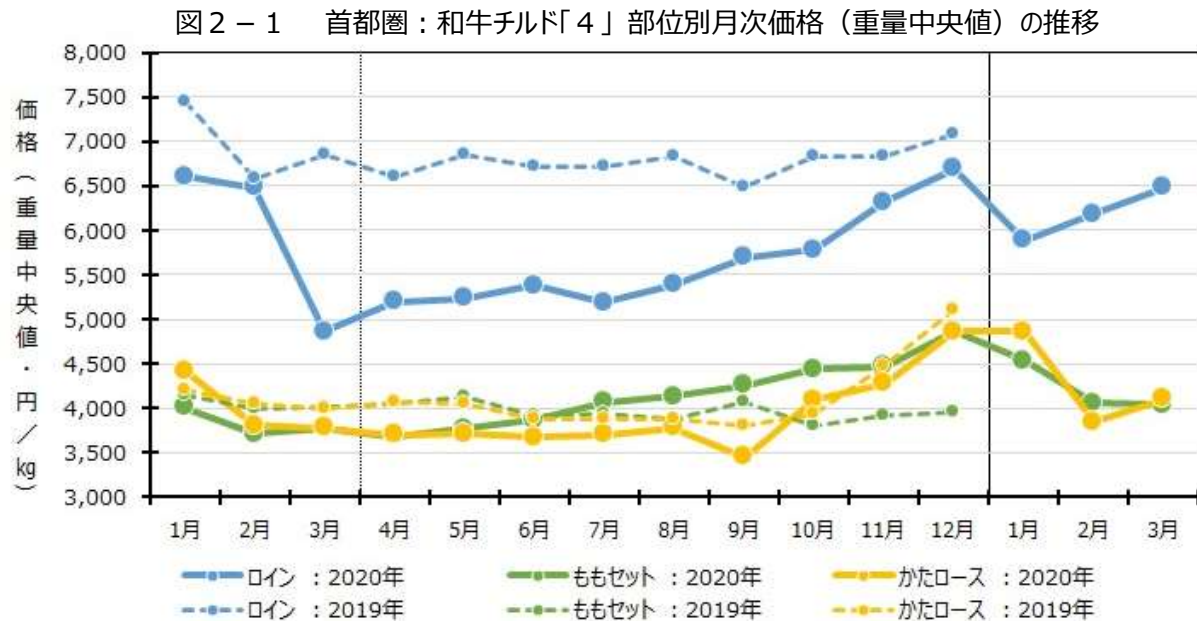


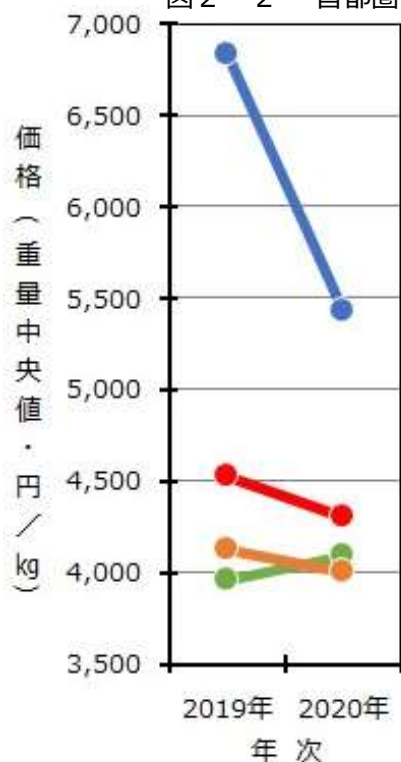
図2-1より、高価格部位である「ロイン」は、2020年3月にセット価格の価格低下率を超えて、価格が急激に低下し、年末に向けて徐々に回復してきましたが、2021年の2月になっても前年比でマイナスのままです。3月は前年の急落後との比較なのでプラスになりましたが、これまでの価格からみると大幅に安い価格です。

「ももセット」は、2020年1月以降、前年を下回って推移してきましたが、6月には「かたロース」価格を超え、前年並みに回復し、7月以降は前年を超えて推移し、前年比での上昇率が3部位の中で最も大きいです。「ももセット」は、単価が安く、脂肪分が相対的に少ないため、スーパーでの切り落としやローストビーフの材料として使用されることが多くなったことが一因とみられます。

「かたロース」は、9月まで低迷しましたが、10月以降急回復し、11月には前年を超え、12月に年内で最も価格が高くなる季節変動がコロナ禍でもみられました。12月には3部位とも、2020年の最高値を付けています。

2021年は、「ロイン」価格では、1月に下落したものの、2月からは回復基調となっています。また、「かたロース」価格では、1月に例年と異なり価格を維持したものの、2月には大きく下落しましたが、3月には若干ですが価格を戻しています。一方、「ももセット」価格は、軟調気味ですが前年比プラスで推移しています。

図2-2 首都圏：和牛チルド「4」部位別年次価格（重量中央値）の推移



部位 \ 年	2019年	2020年	前年比
セット	4,524	4,307	- 4.8 %
ロイン	6,826	5,422	- 20.6 %
ももセット	3,953	4,085	+ 3.3 %
かたロース	4,126	4,000	- 3.1 %

(単位：円/kg, %)

年次ベースでみた場合、2020年は、前年比で、「ロイン」が約21%減と大きく下落していますが、「かたロース」は約3%減とさほど値崩れを起こしておらず、逆に、「ももセット」が約3%増と値上がりし、「かたロース」価格を超えています。

このことから、コロナ禍の影響を大きく受けた部位は「ロイン」であり、【高価格部位】の方が影響が大きかったといえます。セット価格の下落分を超えるロイン価格の下落分について、少しでも補うために「ももセット」に代表される【低価格部位】価格のセット価格に対する比率（比価）の見直しが行われ、【低価格部位】価格の引き上げが行われたと考えられます。

(2) 交雑牛チルド「3」の部位別価格の推移

図3-1 首都圏：交雑牛チルド「3」部位別月次価格（重量中央値）の推移

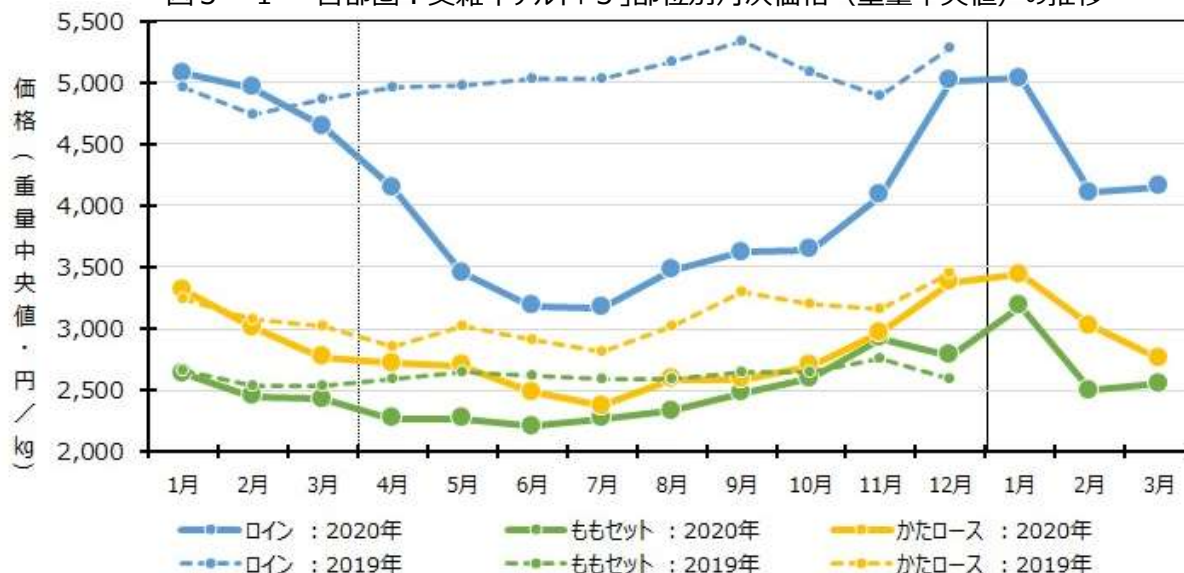
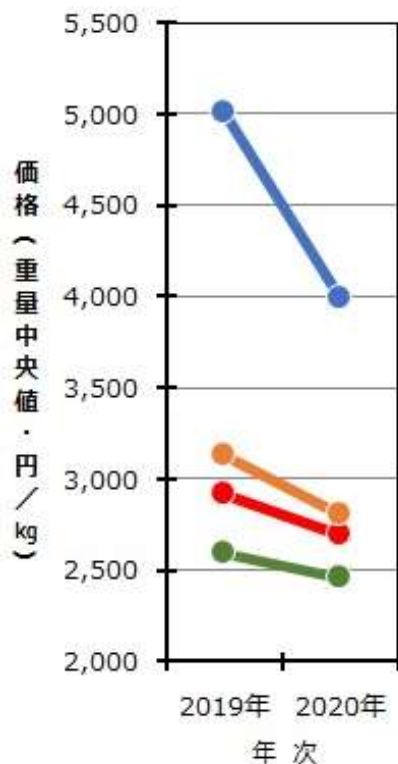


図3-1より、3部位とも、6月まで下落傾向を辿り、うち、「ロイン」の下落率が他の部位に比べて大きいことがわかります。その後、「ももセット」のみ12月で値を下げるものの、前年比がプラスであり、すべての部位は、年末まで回復基調となりました。

2021年1月は、価格が横ばいの「ロイン」以外の2部位は価格を上げています。2月に、「ロイン」と「ももセット」は、下落したものの、3月には若干回復しています。一方、「かたロース」は、2月以降、下落が続いています。

図3-2 首都圏：交雑牛チルド「3」部位別年次価格（重量中央値）の推移



部位 \ 年	2019年	2020年	前年比
セット	2,916	2,691	- 7.7 %
ロイン	4,999	3,986	- 20.3 %
ももセット	2,596	2,462	- 5.2 %
かたロース	3,132	2,808	- 10.3 %

(単位：円/kg, %)

年次ベースでみた場合、2020年は、すべての部位で価格が低下し、【高価格部位】価格の下落率が高いことがわかります。

【高価格部位】の「ロイン」の下落率が最も高く、【低価格部位】の「ももセット」の下落率が最も低いことから、和牛と同様に、【高価格部位】の比価を下げ、【低価格部位】の比価を引き上げたと考えられます。

(3) 乳牛チルド「2」の部位別価格の推移

図4-1 首都圏：乳牛チルド「2」部位別月次価格（重量中央値）の推移

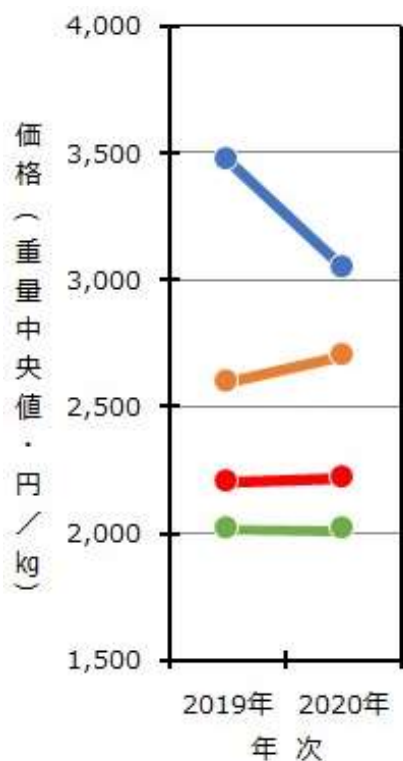


図4-1より、「ロイン」は、4月と11月に下落するまでは、各々の期間で価格を保っていました。年末の12月には、急上昇しましたが、年始レベルには戻りませんでした。2021年1月には、再び下落しましたが、2月以降は回復基調となっています。

一方、「ももセット」は、年間を通じ、2,000円前後と一定水準で推移し、2021年もその状況が続いています。

また、「かたロース」は、ほぼ前年並みで推移し、1月から4月までは緩やかに値を下げ、その後、10月まではほぼ一定水準で推移した後、11月から2021年1月まで上昇し、前年を超えるほどになりましたが、翌2月以降、価格が下落しています。

図4-2 首都圏：乳牛チルド「2」部位別年次価格（重量中央値）の推移



部位 \ 年	2019年	2020年	前年比
● セット	2,204	2,216	+0.5%
● ロイン	3,467	3,047	-12.1%
● ももセット	2,020	2,015	-0.2%
● かたロース	2,592	2,700	+4.2%

(単位：円/kg, %)

年次ベースでみた場合、2020年は、「セット」のわずかな上昇に対し、【高価格部位】の「ロイン」が他の品種と同じく、価格が下落し、その低下率も最も大きいことが判ります。

一方、【低価格部位】の「ももセット」は、ほとんど変化がありません。

しかし、「かたロース」は、価格が上昇していることから、【高価格部位】価格下落分を補うため、「かたロース」の価格を引き上げていると考えられます。

(4) まとめ

上記、2-1 (1) から (3) より、年次でみると、「セット」価格より【高価格部位】の「ロイン」は、すべての牛の品種で3部位の中で最も下落しており、下落率は、前年比で、「和牛」と「交雑」がほぼ同じで約20%減、「乳牛」は約12%減となっています。

季節変動が顕著な「かたロース」は、12月に価格が上昇する傾向は繰り返えされましたが、「乳牛」でのみ価格の上昇がみられました。

【低価格部位】の「ももセット」は、「和牛」でのみ価格の上昇がみられ、「かたロース」の価格を超えていました。

「ロイン」の価格下落をどの部位で補うかは、「セット」価格に対する部位の比価のこれまでの違いが反映され、牛の品種で部位別の比価の見直し方法が異なっていました。

「ロイン」に代表される【高価格部位】は、調理方法が、ステーキ（鉄板焼きを含む。）、焼き肉、すき焼き、しゃぶしゃぶと高価な料理で、ホテル、高級な焼き肉店・旅館で多く使用されます。インバウンドの激減及び短期的な輸出の減少に加え、国内での結婚披露宴やパーティ及び観光旅行の大幅な減少並びに高級な外食機会の減少によって、「ロイン」への需要が大幅に減少したため、脂肪が多く、調理方法が限定的な汎用性の少ない【高価格部位】の「ロイン」が、コロナ禍で一番大きな影響を受けました。

輸入ロインの量が約30%減、輸入品単価が冷蔵9%減、冷凍7%減ですが、国産牛肉の生産量が少しですが増加したこともあって、下落率が「和牛」・「交雑」が20%減、乳牛が20%減と輸入品より大きくなったことからみて、国内「ロイン」系の需要が大幅に縮小したことが判ります。ロイン系統【高価格部位】の需要減は、長期化すると業界関係はみえています。

次に、「ももセット」に代表される【低価格部位】は、「かたロース」と組み合わせて「切り落とし」材料として多く使用されていますが、食肉の売上が増加したスーパーでは、高価な「和牛肉」を単価の安い「切り落とし」として販売することが定着していること及び脂肪の少ない「ローストビーフ」の需要が伸びていることから、下落率が小さくなりました。

**(考察2) 「ロイン」価格の動向が、「和牛」と「交雑」でなぜ違い、
年次ベースでの減少率がほぼ同じであったのか？**

月次グラフ図2－1「和牛」及び図3－1「交雑」をみると、「和牛」では、コロナの影響が出始めた3月に「セット」価格を超えて急落したのを底に、翌4月には反発し、回復基調になっているのに対し、「交雑」では、「和牛」に比べると緩やかに下落、7月を底に回復基調となっています。

「和牛」の「ロイン」の方が「交雑」に比べ価格の回復が早かったのは、スーパーでの特売への取り組み、政府によるコロナ対策及び輸出量において、食肉卸売業者等が「和牛肉」の販売等を「交雑肉」より優先したからです。

「セット」価格では「交雑」の方が下落率が大きかったですが、既述のように、部分肉への加工経費や輸送費がキログラム当たりで上乗せされるため、単価の高い「和牛」ではそれらの経費率が少なく、「交雑」では多くなり、「ロイン」という部位では下落率がほぼ同じになりました。

(考察3) 年末に、軒並み価格が回復したのはなぜか？

これは、1－1の(3)の(考察1)で説明している政府のコロナ対策のひとつである「国産農林水産物等販売促進緊急対策事業」の影響が大きく、需要が完全に戻ったわけではないと業界関係者はみています。

2-2 首都圏における豚肉の価格動向

豚部分肉価格について、首都圏の豚カット肉「I」における「セット」と「ロース」及び「もも」、「ばら」の部位価格を分析しました。

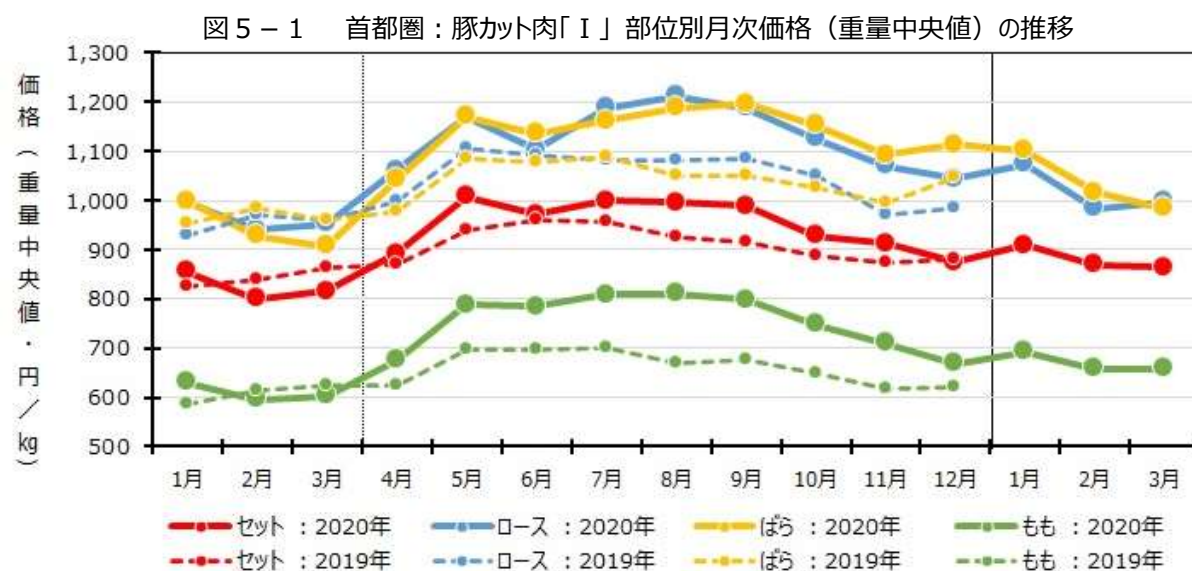


図5-1より、豚部分肉「セット」価格は、2020年2月と3月は前年比マイナスでしたが、4月以降は、牛肉「セット」価格と異なり、前年比プラスに転じ11月まで継続し、12月は前年比マイナスになり、2021年1月～3月までは前年比プラスが継続しました。

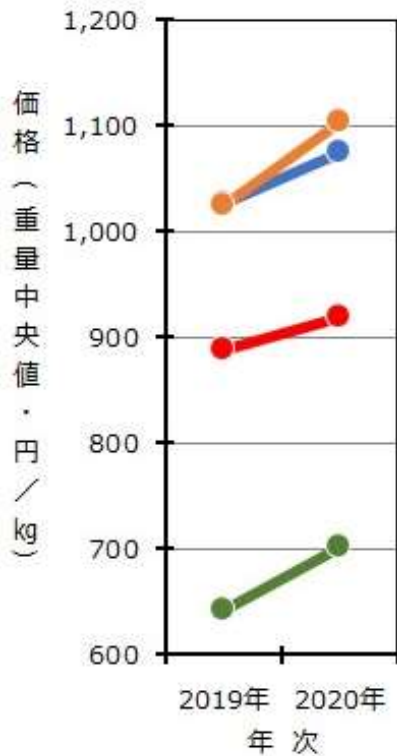
図5-1より、分析した3部位の価格すべてで、2020年4月の上昇以降、前年価格を上回って推移していることが判ります。

また、2020年8月までは、「ばら」よりも「ロース」が高かったものの、9月以降は逆転し、「ばら」の方が「ロース」より高くなり、その状況が2021年2月まで継続しました。

8月以降については、すべての部位で右下がり傾向となりましたが、12月には、「ばら」のみ若干価格を持ち直しています。

2021年では、1月に「ばら」以外は価格の上昇がみられましたが、価格動向は2020年と同じ傾向を示しています。

図5-2 首都圏：豚カット肉「I」部位別年次価格（重量中央値）の推移



部位 \ 年	2019年	2020年	前年比
セット	889	918	+ 3.3 %
ロース	1,026	1,075	+ 4.8 %
もも	643	702	+ 9.2 %
ばら	1,024	1,103	+ 7.7 %

(単位：円/kg, %)

年次ベースでみた場合、2020年は、4部位価格が4月以降前年価格を超えて推移し、前年比の上昇率は「セット」が最も低く、また、【低価格部位】の方が価格上昇率が大きくなっていることが判ります。

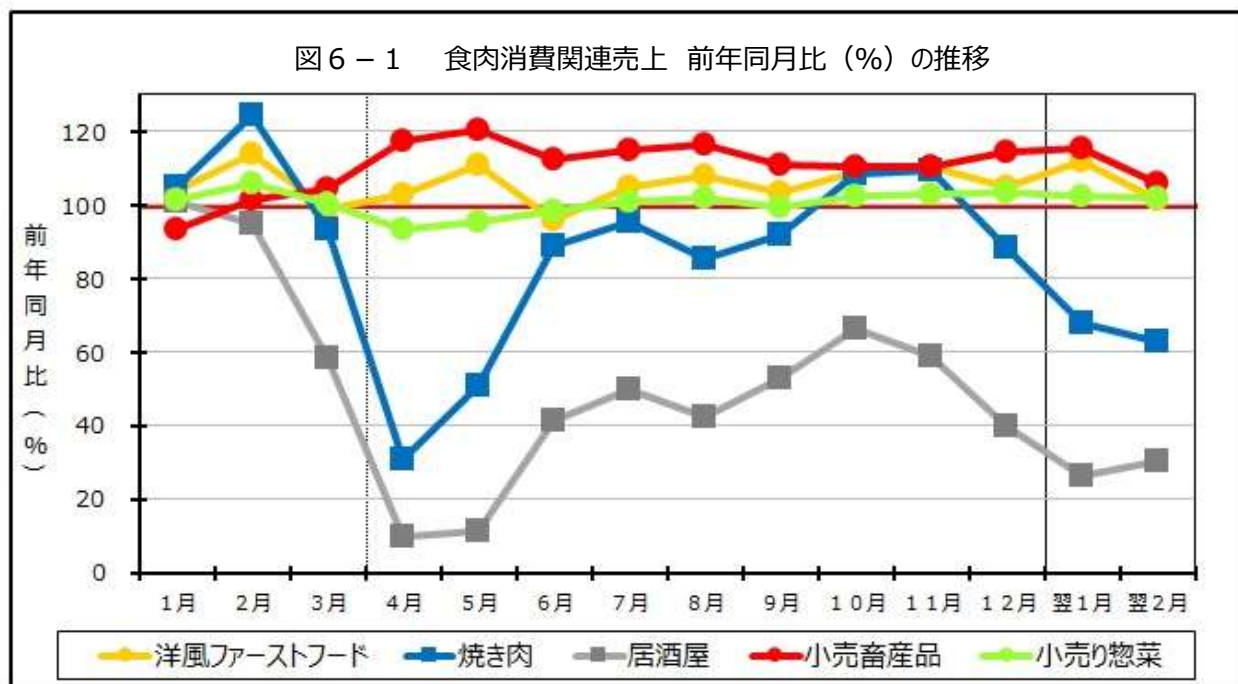
豚枝肉価格が上昇し、連動して部分肉「セット」価格が上昇してきた中で、元々価格の高かった「ロース」に対し、均一に上昇分を転嫁するのではなく、【低価格部位】への転嫁の比重を上乗せした方が消費者に受け入れられやすかったことや「もも」が「切り落とし材料」等として使用されやすく、汎用性が高いことも【低価格部位】の上昇率が高かった理由と考えられます。

なお、9月以降、「ばら」が「ロース」を超えるようになってきたのは、豚ばらを使用したしゃぶしゃぶ鍋・ミルフィーユなどの調理法が普及してきたのが一因で、3月に「ロース」をやや下回ったのは、気温が温かく、鍋料理が減少したためと考えます。

当センターが2020年12月に公表した、首都圏での豚「セット」価格に対する「ばら」価格の比価の2010年から2019年での上昇傾向が、コロナ禍でも継続していました。

3 食肉の消費、外食系が減少、内食系が増加

3-1 食肉卸売業者の主な販売先での売上動向について



食肉卸売業者の主な販売先での2020年1月以降の売上動向を月次ベースでみると、コロナ禍で外食系では減少しており、内食系では増加しており、外食系から内食系に移行しました。

外食である「焼き肉」と「居酒屋」は、4月を底として、「居酒屋」は10月に前年比の70%程度に回復したものの、その後は再び低下、30~40%程度と低迷を続けており、また、「焼き肉」では、10月・11月に前年を超えるまで回復したものの、その後、再び低迷しています。

単価がファミリーレストラン系より高く、夜の営業時間の構成比が高いディナーレストランの売上減少も深刻です。

外食の売上は、コロナの収束がみえてこないと本当の回復は難しいと、食肉卸売業者はみえています。

テイクアウト可能なハンバーガー等の「洋風ファーストフード」のみが外食で前年より売上が多くなっています。

大手スーパーの食肉を含む「小売畜産品」の売上については、2月に前年同月を上回って以降、継続してその状態を維持しているので、家庭内で調理する機会が増加していることが伺えます。

2020年4月に前年比17%増と大きく売り上げを伸ばして以降、2020年1月まで前年比10%超増と好調に推移した反動があつて、スーパー全体としては、今年4月以降は、それほど売り上げが増加しないと食肉卸売業者はみえています。

表2 2020年における各月並びに年平均の食肉消費関連売上（前年同月比：％）の推移

年	年平均		2020年					
項 目 \ 年 or 月	2019年	2020年	1月	2月	3月	4月	5月	6月
一般社団法人 日本フードサービス協会 全店データ 売上高 前年同月比								
全 体	101.9%	84.9%	101.9%	104.8%	82.7%	60.4%	67.8%	78.1%
洋風ファーストフード	103.4%	105.5%	104.1%	114.0%	99.1%	102.8%	110.9%	96.1%
焼き肉	100.3%	89.1%	105.0%	124.4%	93.3%	30.9%	50.9%	88.7%
居酒屋	100.3%	52.3%	101.2%	95.2%	58.6%	9.7%	11.5%	41.5%
ディナーレストラン（計）	101.5%	64.3%	102.3%	97.4%	59.5%	16.0%	28.5%	57.0%
日本チェーンストア協会 販売統計 部門別販売額 前年同月比（店舗調整前）								
小売畜産品	95.5%	110.6%	93.3%	101.5%	104.7%	117.3%	120.6%	112.6%
小売惣菜	101.5%	100.6%	101.3%	106.0%	100.7%	93.6%	95.5%	98.6%

年	2020年						2021年	
項 目 \ 年 or 月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
一般社団法人 日本フードサービス協会 全店データ 売上高 前年同月比								
全 体	85.0%	84.0%	86.0%	94.3%	92.2%	84.5%	79.0%	77.7%
洋風ファーストフード	105.1%	108.2%	103.3%	109.1%	110.4%	104.8%	112.2%	101.5%
焼き肉	95.3%	85.6%	91.7%	108.7%	109.4%	88.6%	68.0%	62.8%
居酒屋	50.0%	42.3%	52.8%	66.2%	58.8%	39.8%	26.5%	30.5%
ディナーレストラン（計）	65.5%	65.1%	71.3%	79.6%	73.4%	58.1%	45.5%	53.7%
日本チェーンストア協会 販売統計 部門別販売額 前年同月比（店舗調整前）								
小売畜産品	114.9%	116.5%	111.1%	110.6%	110.7%	114.6%	115.6%	106.2%
小売惣菜	100.9%	101.9%	99.4%	102.7%	103.1%	103.7%	102.7%	102.1%

* ファーストフード、焼き肉、居酒屋の各業態の内訳に関しては、重複する事業社があるため合計の数値は必ずしも地訳の累計とは一致しない。

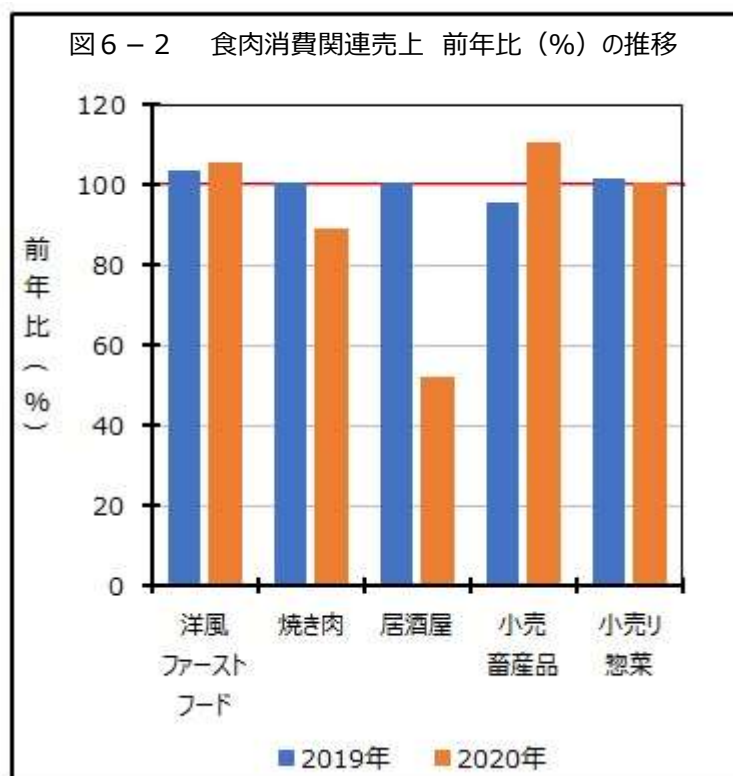


図6-1及び図6-2の出典

洋風ファーストフード、焼き肉、居酒屋（外食系）

：日本フードサービス協会 売上高 全店データ 前年比

小売り畜産品、小売り惣菜（内食系）

：日本チェーンストア協会 販売統計

部門別販売額 前年比 店舗調整前

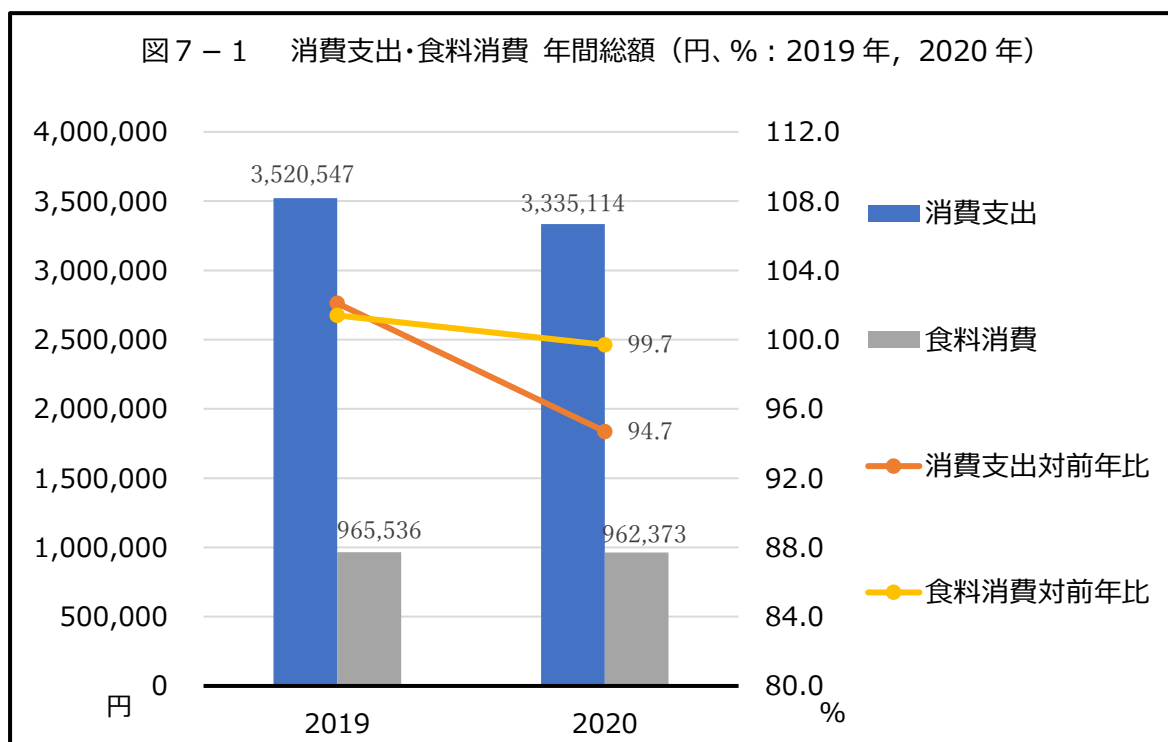
年次ベースでも、外食全体の売上が前年比1.5%減となる中で、「居酒屋」の下落率が非常に高く（4.8%減）、「焼き肉」の下落率は低い（1.1%減）です。唯一「洋風ファーストフード」が、従来より利用可能であったテイクアウトやドライブスルーの利用率も高いためか、前年を超える売上が継続しています。

大手スーパーでの「小売畜産品」の売上が増加しています。

後述する家計消費の動向と外食産業やスーパーの売上動向は一致しています。

3-2 「家計調査」からみた食肉の消費動向

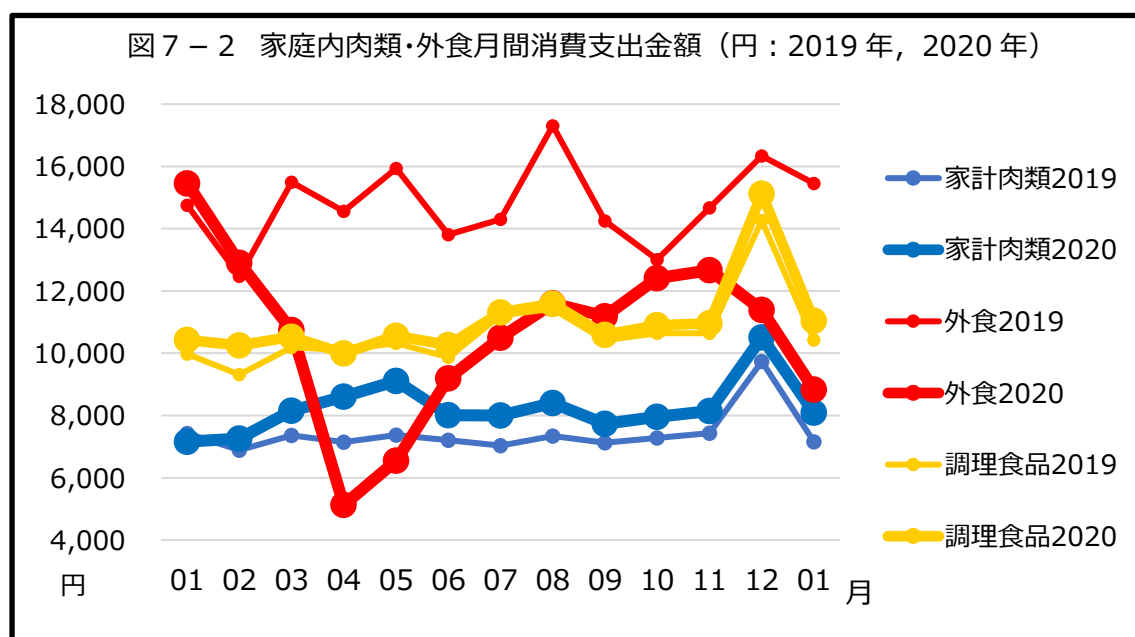
(1) 消費支出全体について



出典：総務省統計局「家計調査」

図7-1より、2020年は、家計の「消費支出」全体が前年比5.3%減少し、食料に対する消費支出も、僅かですが、減少しました。その結果、エンゲル係数が上昇しました。

(2) 「家計」による家庭内、外食の区別から見た食肉の消費動向について



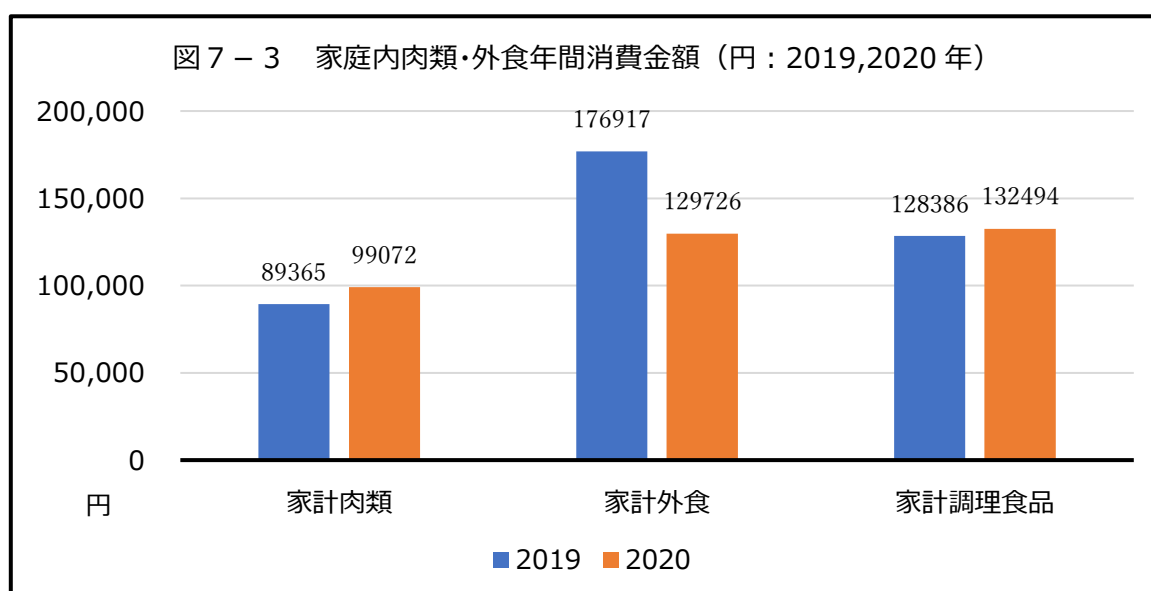
出典：総務省統計局「家計調査」

2020年の「家計」からみた主な項目の消費支出の動向を示したのが図7-2のグラフです。

図7-2より、肉類への消費支出は2020年2月以降、前年を上回って推移し、1回目緊急事態宣言下の4月及び5月は上昇率が高く、それ以降も上昇率は鈍化したものの、増加傾向が続いています。

外食は、5月以降回復しつつありましたが、年末からのコロナ感染の再拡大、年明けの2回目の緊急事態宣言発出により、例年の年末・年始の需要を取り込めず、苦戦をいられています。

一方、調理食品は、安定した消費の動向を示しており、年末・年始の動きも例年の動向となっています。



出典：総務省統計局「家計調査」

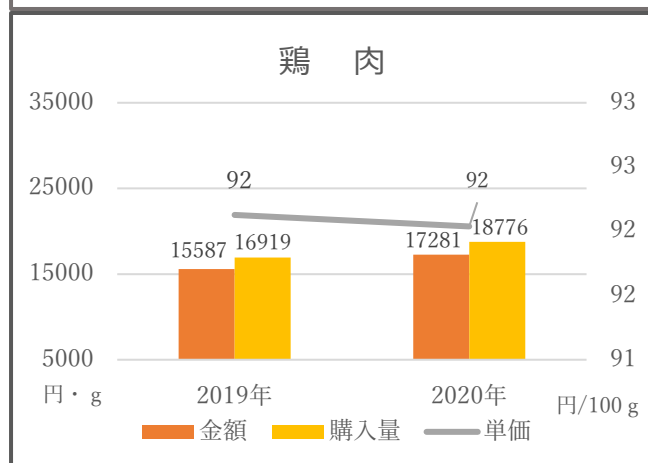
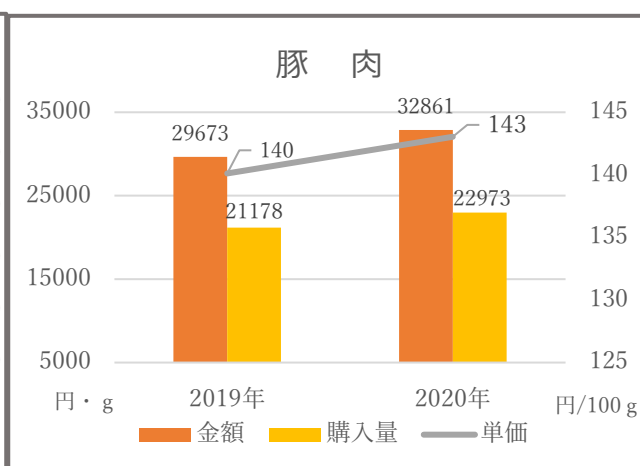
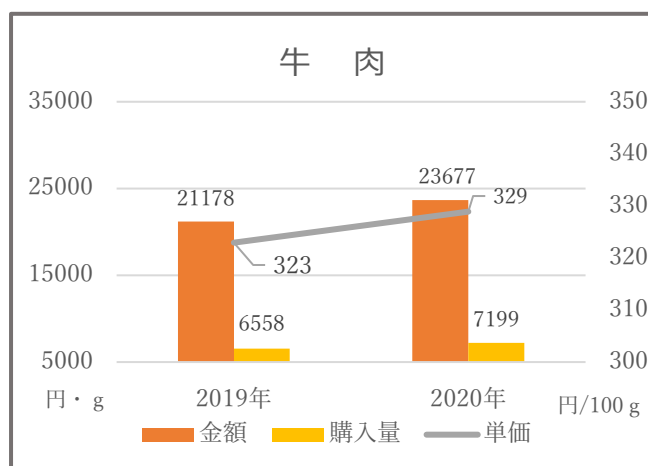
図7-3より、年間合計についてみると、外食に対する消費支出が前年比27%も減少しています。緊急事態宣言等に伴う外出自粛、飲食店への時短及び休業要請の影響とみられます。一方、家計での肉類への消費支出は増加し、調理食品もわずかに増加しました。

家計での肉類への消費支出の増加は、自宅で少し贅沢したいというニーズの対象になっているからと考えられています。

(3) 食肉への消費支出の動向について

家計調査による肉類支出金額及び購入量（全国全世帯品目別、1世帯あたり）（単位：円、円/100g、g）

	牛肉			豚肉			鶏肉		
	金額	単価	購入量	金額	単価	購入量	金額	単価	購入量
2019年	21178	323	6558	29673	140	21178	15587	92	16919
2020年	23677	329	7199	32861	143	22973	17281	92	18776
前年比	112%	102%	110%	111%	102%	108%	111%	100%	111%



畜肉各種の年間の家計消費支出の金額の推移を上記の表・グラフでみると、どの畜肉も支出金額は前年を上回っています。

「牛肉」及び「豚肉」は100g当たりの購入単価が上昇しましたが、「鶏肉」はわずかながら減少しました。

出典：総務省統計局「家計調査」

コロナ禍において外食が減り、巣ごもり消費が定着してきた中で、牛肉については、政府の販売促進政策により小売業種への国産牛肉の単価引き下げ販売が可能な状況や、輸入牛肉の単価が減少した状況や全体の推定出回り量が減少した状況であったにもかかわらず、家計消費における購入単価や購入量が増加しています。これは肉類の中でもより単価の高い牛肉が、前述したプチ贅沢の対象として選択されたためと言えます。

豚肉の単価上昇は卸売相場の上昇が小売価格に反映されたためとみられます。

（考察４）家計消費での牛・豚肉の購入単価上昇の分析

表３－１ スーパー・食肉専門店等での牛肉の種類別販売割合（推定）（単位：重量・千トン、構成比・％）

（２０１８年度）		小売店（合計）		スーパー		専門小売店		その他小売	
		重量	構成比	重量	構成比	重量	構成比	重量	構成比
牛肉販売総量		439	100 %	341	100 %	57	100 %	41	100 %
うち	国産牛肉	228	52 %	173	51 %	41	72 %	14	34 %
	うち 和牛	99	23 %	75	22 %	20	35 %	4	10 %
	交雑牛	57	13 %	38	11 %	12	21 %	7	17 %
	乳牛	72	16 %	60	18 %	9	16 %	3	7 %
	輸入牛肉	211	48 %	168	49 %	16	28 %	27	66 %
	うち 冷蔵	153	35 %	134	39 %	10	18 %	9	22 %
	冷凍	58	13 %	34	10 %	6	11 %	18	44 %

資料：当センターの食肉流通実態調査（２０２０年６月公表）の牛肉・豚肉の需要量推計のデータ

２０２０年の家計調査で牛肉の購入単価は前年比２％上昇して１００ｇ当たり３２９円です。

上記の表から、２０１８年度において、国産牛肉を５２％、輸入牛肉を４８％消費者が小売店より購入しており、家計消費での購入単価はそれを反映しています。この単価からみて、国産「ロイン」のような【高価格部位】は、家計消費でほとんど購入されていません。

２０２０年のコロナ禍で、国産牛肉の推定出回り量の割合が高まり、輸入牛肉のＣＩＦ単価が減少していた中で、家計の購入単価が上昇したのは、単価の高い「国産牛肉」の購入の割合が高まったためです。

国産の中で単価の安い「乳牛肉」は、スーパーで販売される割合が高いですが、近年、生産量が減少しており、販売実量が減少しているとみられ、購入単価の上昇は、「和牛肉」又は「交雑肉」の増加だと推定します。

表３－２ スーパー・食肉専門店等での豚肉の種類別販売割合（推定）（単位：重量・千トン、構成比・％）

（２０１８年度）		小売店（合計）		スーパー		専門小売店		その他小売	
		重量	構成比	重量	構成比	重量	構成比	重量	構成比
豚肉販売総量		943	100 %	713	100 %	140	100 %	90	100 %
うち	国産豚肉	619	66 %	452	63 %	112	80 %	55	61 %
	輸入豚肉	324	34 %	261	37 %	28	20 %	35	39 %
	うち 冷蔵	291	31 %	237	33 %	26	19 %	28	31 %
	冷凍	33	3 %	24	3 %	2	1 %	7	8 %

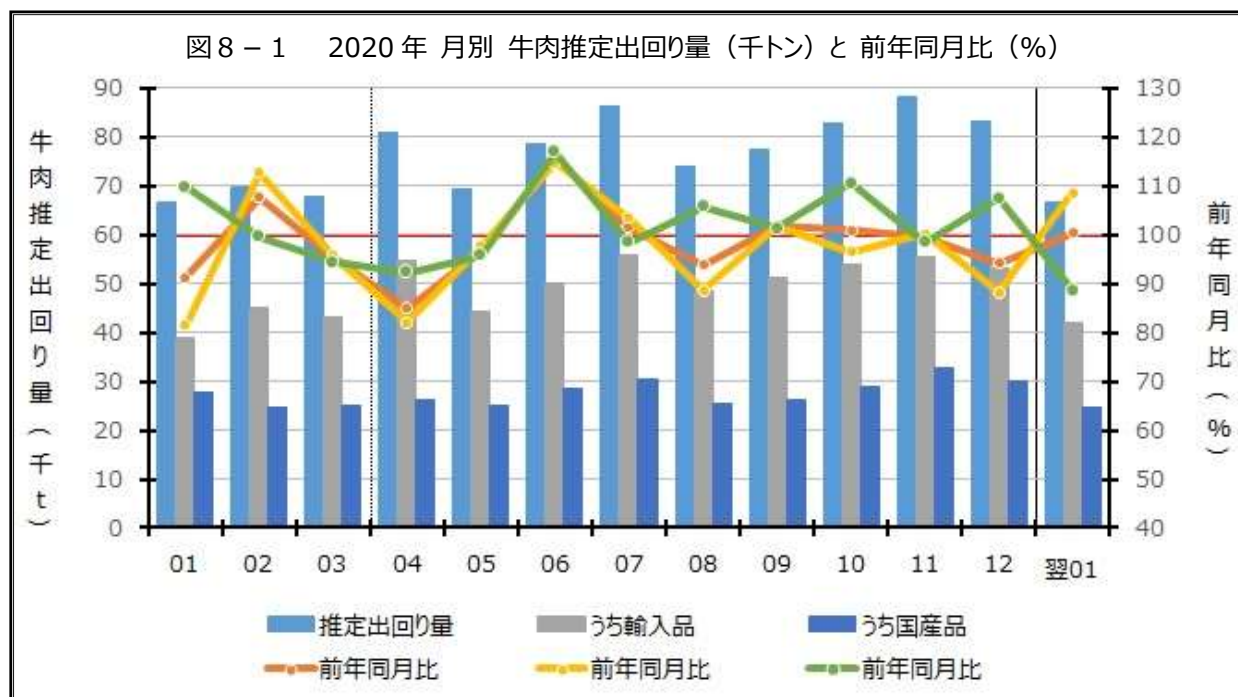
資料：当センターの食肉流通実態調査（２０２０年６月公表）の牛肉・豚肉の需要量推計のデータ

２０２０年の家計調査で豚肉の購入単価は前年比２％上昇の１４３円です。

表５－２より、輸入豚肉のＣＩＦ価格がほとんど変化していないので、家計での購入単価の上昇は、国内卸売価格上昇の反映ですが、卸売価格の上昇より少ないので、食肉卸売業者の豚肉の利益率は低下したとみられます。

4 食肉の需給動向について

4-1 牛肉の推定出回り量（流通量）について



出典：独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」

図8-1より、牛肉の2020年における「推定出回り量」を月次ベースで見ると、前年比の減少率が高い時期は、コロナ感染が拡大した時期（4・5月及び8月、12月、翌1月）と一致しています。但し、8月・10月及び12月、前年比の動きは、「輸入品」と「国産品」では逆の動きをみせましたが、「全体量」では、流通量が多い「輸入品」に左右された動きとなっています。



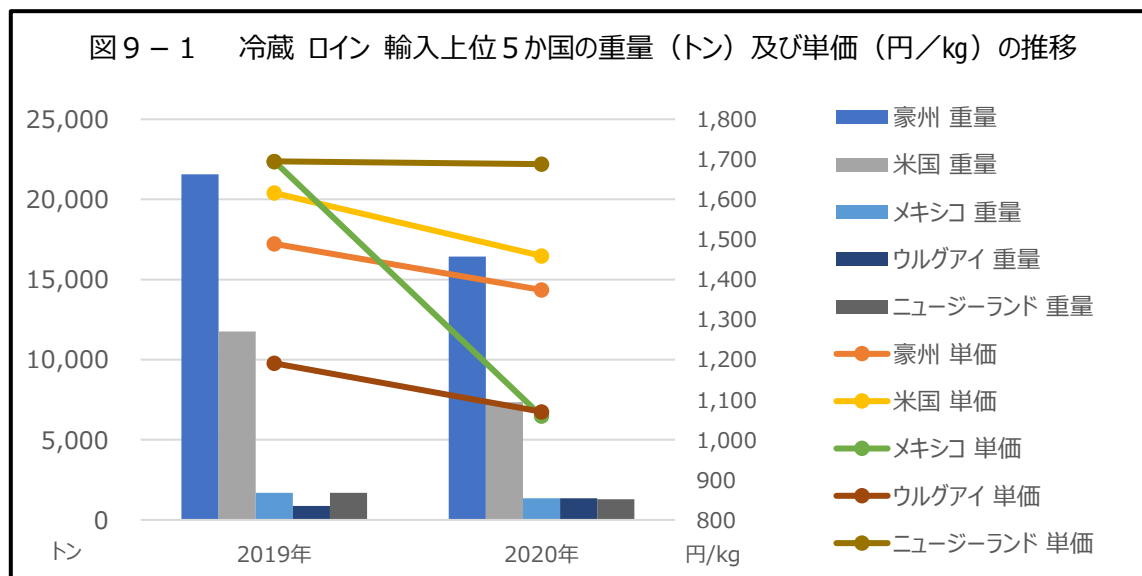
図8-2より、年次ベースで見ると、2019年は、減少した「国産品」に対し、「輸入品」の増加が大きく、全体では若干増加しました。2020年では、「国産品」が増加していますが、「輸入品」の減少率が大きく、「全体量」も減少しています。

出典：独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」より算出

4-2 2020年における牛肉の輸入及び輸出について

(1) 牛肉の輸入数量及び単価について

① 冷蔵ロイン



	輸入量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合 計	<u>38,254</u>	28,275	1,516	1,377
うち 豪 州	21,561	16,428	1,489	1,374
米 国	11,763	7,334	1,616	1,459
メキシコ	1,698	1,357	1,695	1,059
ウルグアイ	867	1,356	1,191	1,070
ニュージーランド	1,698	1,291	1,695	1,688

出典：財務省「貿易統計」より算出

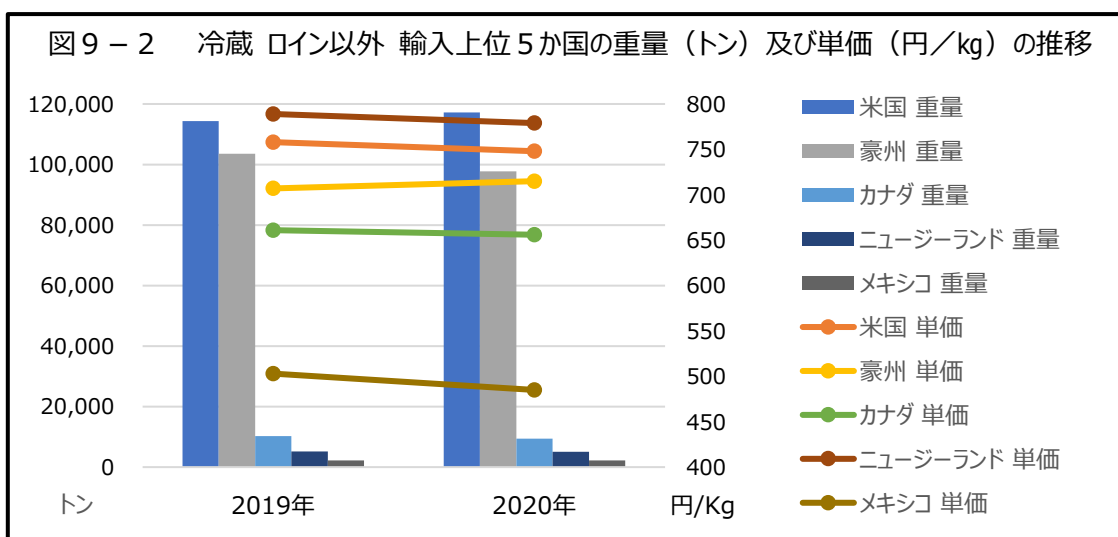
冷蔵ロインの輸入数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

2020年3月以降、高価格部位である冷蔵ロインの輸入数量は大幅に減少、年次ベースで前年比26%減となりました。輸入単価も前年比9%減となりました。

国内のロイン市場の縮小が反映された結果、輸入数量及び単価が減少しました。

2019年の冷蔵品輸入全体量273,990トン(38,254+235,736)のうち、ロインの割合は14%と、牛1頭分から取れる割合と概ね同じでしたが、2020年は11%と低下しました。

② 冷蔵ロイン以外



	輸入量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合 計	235,736	232,565	730	728
うち 米 国	114,363	117,230	758	748
豪 州	103,560	97,747	707	715
カナダ	10,216	9,359	661	656
ニュージーランド	5,131	5,058	789	779
メキシコ	2,219	2,244	503	485

出典：財務省「貿易統計」より算出

ロイン以外の部位の冷蔵牛肉の輸入数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

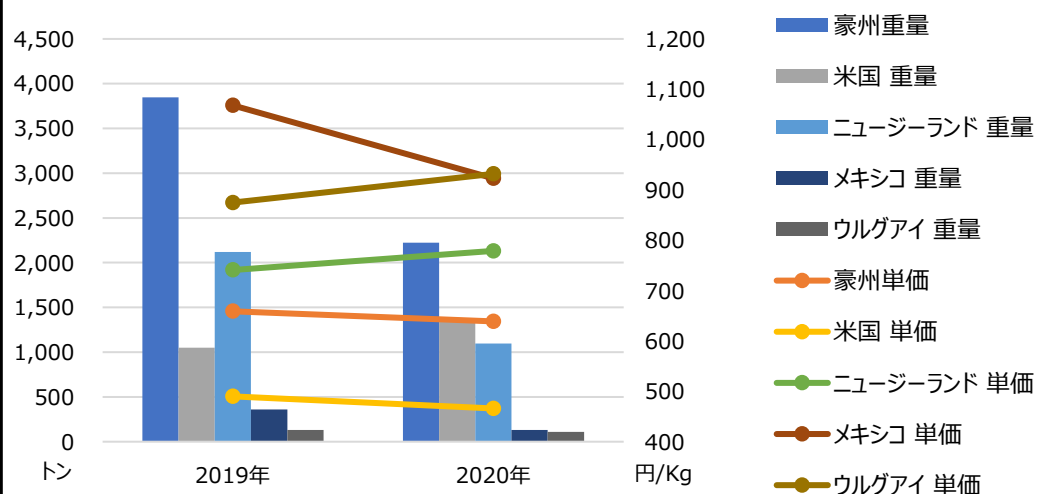
ロイン以外の部位の冷蔵牛肉の輸入数量は年次ベースで、2020年は前年比わずか1%減となりました。

主要輸入国別にみると、かんばつの影響により国内生産量が減少した豪州では、現地相場が上昇したため、前年比6%減となりました。米国ではコロナの感染拡大により、食肉処理場の操業停止や港湾荷役の混乱がありましたが、豪州の生産量減少の代替として米国産が輸入されたこともあり、米国からの数量が前年比3%増となりました。

単価は、2020年は前年とほぼ同じとなっています。コロナの世界的な感染拡大による海上運賃の高騰、米国における牛肉の短期的な相場の乱高下及び中国の輸入量急増など国際的に牛肉価格に係る大きな乱要因がありましたが、年次ベースでみれば輸入価格に大きな変化はありませんでした。

③ 冷凍ロイン

図9-3 冷凍ロイン 輸入上位5か国の重量(トン)及び単価(円/kg)の推移



	輸入量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	7,636	5,047	689	642
豪州	3,848	2,223	659	639
米国	1,052	1,352	490	466
ニュージーランド	2,121	1,097	741	779
メキシコ	361	132	1,068	923
ウルグアイ	130	111	875	932

出典：財務省「貿易統計」より算出

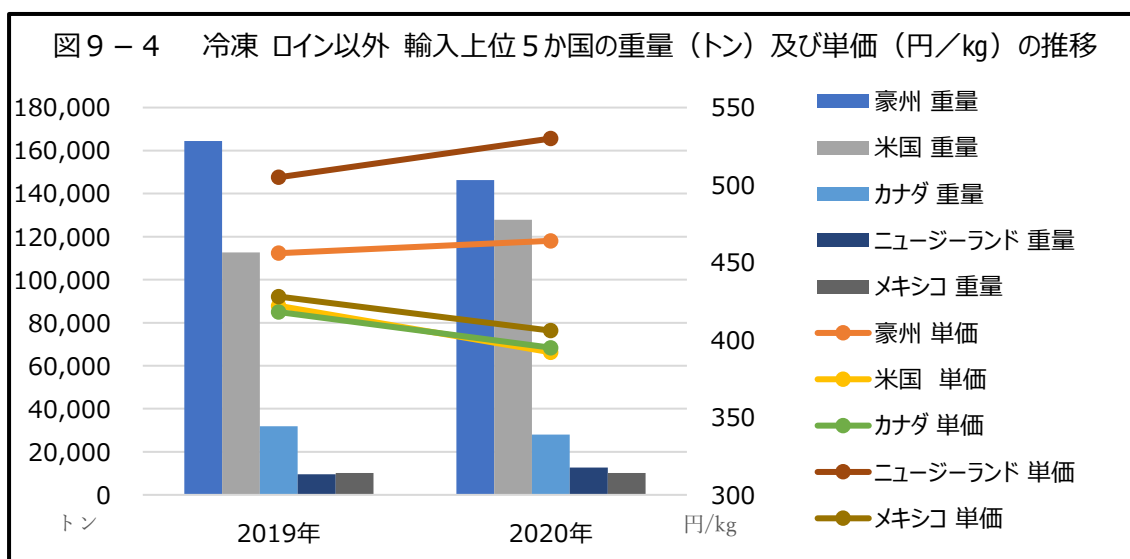
冷凍ロインの輸入数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

冷蔵品と異なり、冷凍品輸入量では、ロインの占める割合は極めて少なく、2019年で2%、2020年で1%でした。

2020年3月以降、高価格部位である冷凍のロインの輸入数量は大幅に減少し、年次ベースで2020年は前年比34%減となりました。単価も前年比7%減となりました。

こちらも冷蔵ロイン同様、国内のロイン市場の縮小が反映され、輸入数量及び単価が減少しました。

④ 冷凍ロイン以外



	輸入量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	332,008	332,870	442	431
うち 豪 州	164,385	146,302	456	464
米 国	112,669	127,860	422	392
カ ナ ダ	31,890	28,071	418	395
ニュージーランド	9,596	12,721	505	530
メ キ シ コ	10,191	10,172	428	406

出典：財務省「貿易統計」より算出

冷凍のロイン以外の部位の輸入数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

冷凍ロイン以外の部位の輸入数量は、2020年の年次ベースで、冷蔵品と同様に、豪州が減少した一方、米国が増加し、全体では2019年と同程度の数量となりました。
単価は前年比2%減となりました。

(2) 牛肉の輸出の数量及び単価について

表4 牛肉全体の直近2年の輸出動向(数量及び金額)

(単位: トン、百万円)

	合計数量					
		うちカンボジア	香港	台湾	米国	シンガポール
2019年	4339	1158	878	633	398	289
2020年	4845	1175	1091	815	525	320
前年比	1.12	1.01	1.24	1.29	1.32	1.11

	合計金額					
		うちカンボジア	香港	台湾	米国	シンガポール
2019年	29673	8673	5074	3681	3077	1691
2020年	28874	7734	5405	4145	4196	1762
前年比	0.97	0.89	1.07	1.13	1.36	1.04

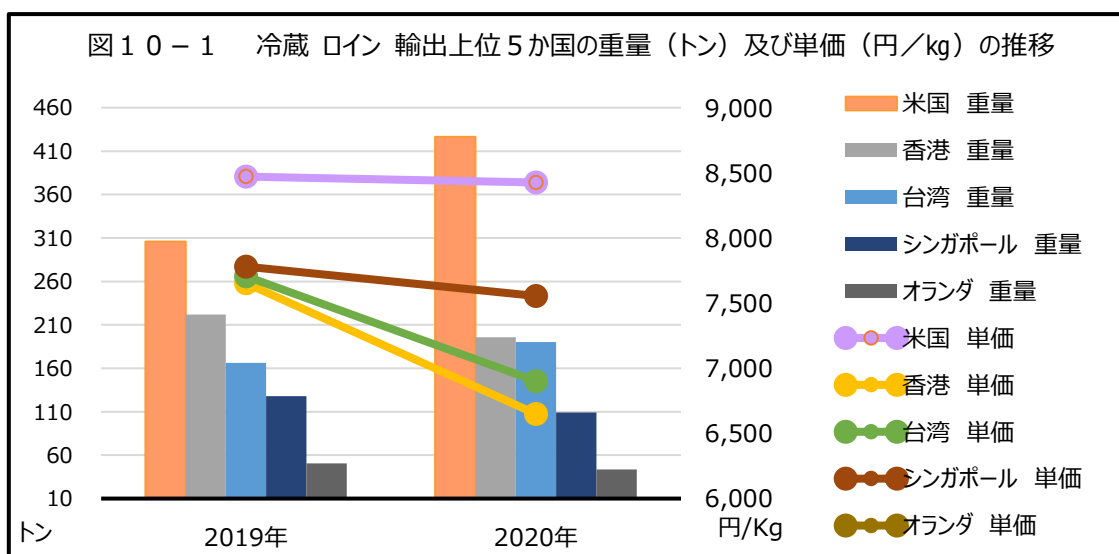
資料: 財務省「貿易統計」

輸出単価 2019年 6,839 円/Kg → 2020年 5,960 円/Kg (前年比 87%)

2020年の牛肉全体の輸出数量は前年比12%増の4,845トンとなり、輸出先はカンボジア、香港、台湾、米国、シンガポールの順で多く、いずれも前年輸出量を超え、前年の順位と変わりませんでしたが、前年比の増加率を比較すると、米国、台湾、香港が全体の増加率を超えていました。

輸出金額をみると、前年比3%減の289億円となりました。これは輸出数量が1位のカンボジア向けの数量が増加したにも関わらず、前年比11%減となり、輸出全体でキログラム当たりの単価が数量の増加率12%を超える13%減の5,960円となったためです。

① 冷蔵ロイン



	輸出量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	1,112	1,145	8,576	7,992
うち 米 国	306	427	8,471	8,427
香 港	222	196	7,654	6,650
台 湾	166	190	7,706	6,902
シンガポール	128	109	7,780	7,556
オランダ	50	43	11,994	10,492

出典：財務省「貿易統計」

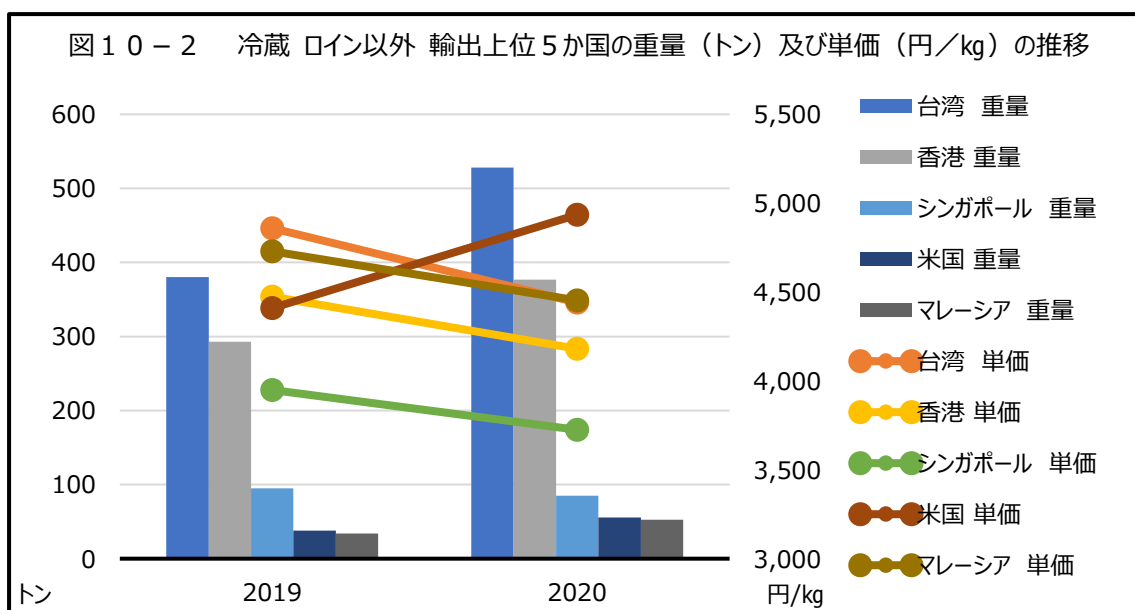
ロイン系冷蔵牛肉の単価がキログラム当たり8,000円前後であること及び業界のヒアリング結果からみて、和牛肉以外の輸出量は極めて少ないことから、貿易統計上の牛肉の輸出量はすべて和牛肉としました。

和牛の冷蔵ロインの輸出数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

2020年3月以降、輸出数量は大幅に減少しましたが、8月以降回復に転じ、年次ベースでは、数量は微増の1,145トン、単価は前年比7%減の7,992円/kgとなっています。

単価の下落は国内相場下落を反映した結果ですが、その減少率は国内相場に比べて小さく、輸出が国内ロイン相場を下支えしています。

② 冷蔵ロイン以外



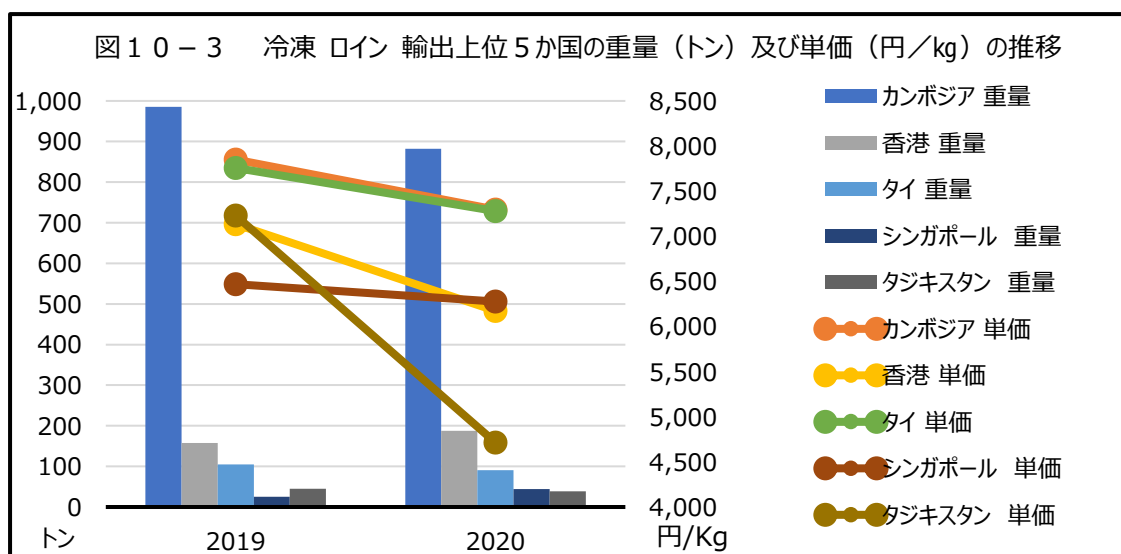
	輸出量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	953	1,196	4,729	4,453
うち 台湾	380	528	4,859	4,441
香港	293	42	4,474	4,181
シンガポール	95	85	3,949	3,725
米国	38	56	4,410	4,935
マレーシア	34	53	5,265	5,172

出典：財務省「貿易統計」

和牛のロイン以外の部位の冷蔵牛肉の輸出数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

2020年3月以降輸出数量は減少しましたが、年次ベースで25%増となりました。単価は4,453円と、米国を除いて2020年は前年比で減少していますが、冷蔵ロインの7%減より価格低下率は6%減と小さいです。

② 冷凍ロイン



	輸出量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	1,552	1,444	7,878	7,105
うち カンボジア	986	882	7,850	7,296
香港	158	187	7,134	6,173
タイ	105	91	7,757	7,279
シンガポール	25	44	6,469	6,277
タジキスタン	45	39	7,230	4,714

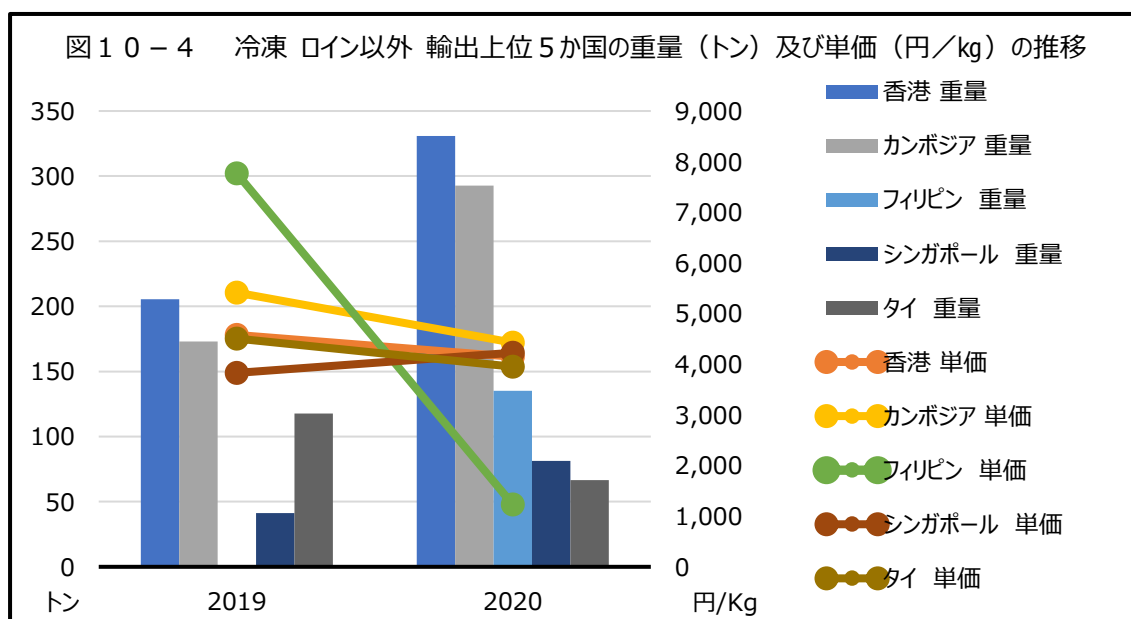
出典：財務省「貿易統計」

和牛の冷凍ロインの輸出数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

2020年3月以降、輸出数量は大幅に減少し、8月以降回復に転じましたが、年次ベースでは前年を上回ることとはなく、前年比7%減の1,444トンという結果に終わっています。冷蔵品と冷凍品のロインの合計輸出量は2,589トンで前年より75トン減少していますが、国内の和牛ロイン生産量の約13%を占めています(推定)。

2020年の単価は、前年比10%減と冷蔵品の7%減より大きく下落しています。

○冷凍 ロイン以外



	輸出量(トン)		単価(円/Kg)	
	2019 年	2020 年	2019 年	2020 年
合計	722	1,059	4,711	3,903
うち 香港	206	331	4,579	4,148
カンボジア	173	293	5,414	4,426
フィリピン	1	135	7,769	1,231
シンガポール	41	81	3,829	4,227
タイ	118	67	4,506	3,952

出典：財務省「貿易統計」

和牛のロイン以外の部位の冷凍牛肉の輸出数量および単価について、2019年と2020年を比較した資料が上記グラフです。

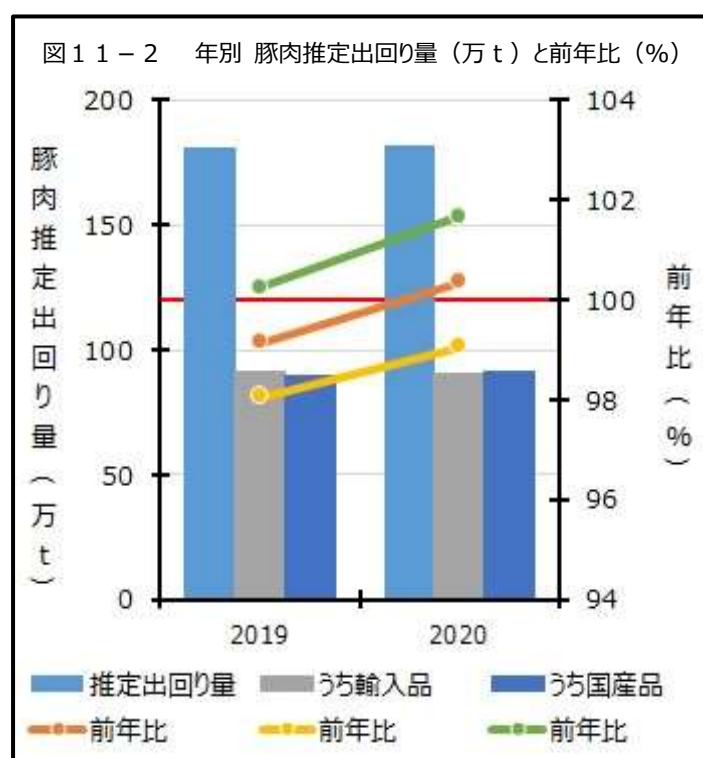
輸出数量は、年次ベースで前年比47%増の1,059トンと大幅に増加しました。逆に、2020年の単価は13%減と大きく下落しています。135トンと大幅に輸出量が増加したフィリピン向けの単価が1,231円であることから和牛肉以外が含まれていると考えられます。

4-3 豚肉の推定出回り量（流通量）について



出典：独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」

図11-1より、2020年の「推定出回り量」を月次ベースでみた場合、前年比の減少率が高い時期は、2月、5月、8月～12月です。また、8月以降、「輸入品」の減少、「国産品」の需要が高まっていたのに加え、前年比の動きが、牛肉と同様に、「輸入品」と「国産品」では逆の動きをしています。



出典：独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」より算出

年次ベースでみた場合、2019年は「輸入品」が減少したものの、「国産品」が増加したため、「全体」では微減でした。

2020年では、「輸入品」は、前年を下回っています。一方、「国産品」が、前年を上回って増加したため、「全体」では増加しました。

4-4 豚肉の輸入数量及び単価について

表5-1 豚肉の輸入数量（単位：トン）の推移

（単位：合計と部分肉・トン，前年比・％）

輸 入 量		生 鮮・冷 蔵				冷 凍				総 合 計	
年	月	合計 ※1	前年比	うち 部分肉	前年比	合計 ※1	前年比	うち 部分肉	前年比	合計 ※1,2	前年比
2019	年度	415,663	102.5	414,955	102.5	537,419	105.2	536,242	105.2	953,112	104.0
2020	1	33,546	106.7	33,493	106.7	38,733	128.0	38,661	128.3	72,280	117.1
	2	34,990	117.3	34,934	117.2	31,997	61.8	31,947	61.8	66,987	82.1
	3	35,452	103.9	35,393	103.9	32,175	93.3	32,098	93.3	67,628	98.6
	4	37,626	104.2	37,537	104.1	63,942	102.9	63,833	103.0	101,568	103.4
	5	33,478	95.7	33,411	95.7	46,387	93.9	46,285	93.9	79,864	94.6
	6	31,995	100.0	31,942	100.0	47,506	107.3	47,390	107.3	79,522	104.3
	7	34,642	96.3	34,579	96.3	40,368	81.8	40,292	81.8	75,011	87.9
	8	31,271	87.5	31,204	87.5	37,160	75.5	37,116	75.6	68,431	80.5
	9	32,565	111.0	32,505	111.0	32,850	67.3	32,788	67.4	65,416	83.7
	10	35,064	95.6	34,990	95.5	37,351	79.1	37,274	79.1	72,415	86.3
	11	38,515	105.7	38,428	105.7	31,964	69.1	31,885	69.1	70,497	85.2
	12	36,848	107.0	36,779	107.0	34,627	91.5	34,526	91.5	71,474	98.9
2021	1	33,495	99.8	33,446	99.9	33,125	85.5	33,057	85.5	66,620	92.2
	2	31,633	90.4	31,584	90.4	32,576	101.8	32,512	101.8	64,209	95.9
年度累計		377,131	99.2	376,405	99.2	437,857	86.7	436,959	86.7	815,028	92.0

資料：財務省「貿易統計」 注1：部分肉換算した数値である（※1）。

注2：くず肉を含む（※2）。

注3：直近2月は速報値である。

表5-1より、豚肉の輸入数量の推移をみると、今年2月までの2020年度では「生鮮・冷蔵」（以降、「チルド」という。）で、5月、7月、8月、10月、11月、12月は前年を下回っており、他の月は前年を上回っており、2月までの年度ベースでは1%減です。

「生鮮・冷蔵」の輸入量は、需要期である、4月は貿易協定等による関税引き下げを待っての通関手続きの影響で増加し、11月・12月は、国産豚肉が高値で推移してきた背景の下、輸入物で代替する動きが反映されたため、増加しました。

また、7月・8月は、輸出国でのコロナ禍等の食肉加工処理場での陽性者の発生、港湾荷役の停滞並びに中国の国内減産を補う大量輸入により、日本への輸出が計画的に実施できなかったため、輸入量は減少しました。

「冷凍」及び「総合計」では、7月以降2月まで、前年割れで推移し、2月までの年度ベースで「冷凍」は13%減、「総合計」は8%減です。

年間輸入量が減少傾向ですが、主として、輸出国側の事情等の海外要因によるものと業界関係者はみています。

表5-2 豚肉の輸入価格（輸入単価：単位・円/kg）の推移

（単位：合計と部分肉・円/kg，前年比・％）

輸入価格		生鮮・冷蔵				冷 凍				総合計	
年	月	合計 ※1	前年比	うち 部分肉	前年比	合計 ※1	前年比	うち 部分肉	前年比	合計 ※1,2	前年比
2019	年度	527	100.1	527	100.1	529	100.7	529	100.7	528	100.4
2020	1	528	99.8	527	99.8	534	101.4	533	101.5	531	100.6
	2	529	99.9	528	99.9	540	103.0	539	103.0	534	101.5
	3	527	100.0	526	100.0	539	102.9	538	102.9	533	101.4
	4	526	99.8	526	99.8	546	104.2	545	104.3	539	102.6
	5	526	99.7	526	99.7	543	103.9	543	103.9	536	102.1
	6	542	102.5	542	102.5	536	102.3	535	102.4	538	102.4
	7	581	110.2	581	110.3	535	102.0	535	102.0	556	105.8
	8	528	100.4	528	100.4	529	100.1	529	100.2	529	100.2
	9	527	100.1	526	100.1	522	98.7	522	98.7	524	99.3
	10	525	99.8	524	99.8	521	97.6	520	97.7	523	98.6
	11	526	99.9	525	99.9	520	97.7	520	97.6	523	98.8
	12	528	100.2	528	100.2	525	98.5	524	98.5	527	99.3
2021	1	525	99.5	524	99.5	523	98.0	523	98.0	524	98.7
	2	524	99.1	524	99.1	519	96.1	518	96.1	521	97.6
年度平均		533	101.0	532	101.0	531	100.4	530	100.4	532	100.7

資料：財務省「貿易統計」注1：部分肉換算した数値である（※1）。

注2：くず肉を含む（※2）。

注3：直近2月は速報値である。

表5-2より、輸入豚肉のキログラム当たりの単価の推移をみると、2020年度では、「チルド」で、輸入量の減少が顕著であった7月の価格が前年比10%高となっていました。前述した、海外事情により単価が上昇したとみられます。9月以降の単価では、チルドは前年並み、冷凍は前年を下回って推移してきました。

年度ベースでみると、貿易協定の関税率削減効果より、コロナ禍を含む海外要因の方が輸入単価により影響を与えたと考えられます。

参 考 訪日外客数^(※注)と国産牛肉価格との関連の分析

1 牛部分肉セット価格と訪日外客数について

コロナウイルス感染症の世界的な拡散により、2019年まで増加してきた訪日外客数が、入国制限措置の導入により、2020年初頭から急激に減少しました。いわゆるインバウンドの激減により、国産の牛肉価格が影響を受けたとみられます。

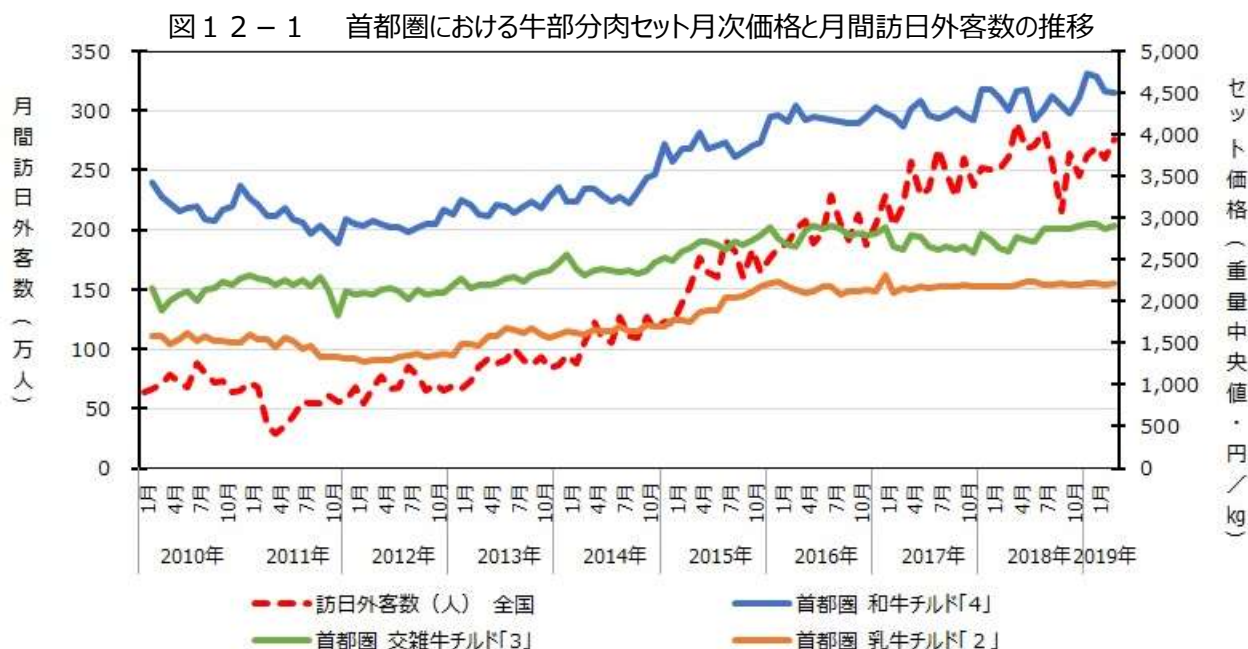


図12-1からわかるように、2014年4月ごろから月間訪日外客数が100万人を超える状態となり、以降2019年まで急激に増加してきました。

一方、2010年から2014年初めまで、「和牛」、「交雑」、「乳牛」の各々の部分肉「セット」価格は、概ね横ばいあるいは低下傾向でしたが、訪日外客数が大きく増加するとともに、価格は上昇傾向に転じています。

「和牛」と「乳牛」の「セット」価格について、訪日外客数が月間100万人程度までの期間とそれを明らかに超えた期間に区分して、価格と訪日外客数との相関及び回帰式を求めたものが、図12-2（和牛）、図12-3（乳牛）です。

「和牛」及び「乳牛」とも訪日外客数が少なかった期間前半に比べ、多くなった期間後半の方が両者の正の相関が高く、係数は「和牛」の方が「乳牛」より高くなっています。

こうした状況下で、入国制限措置が導入されたため、和牛の価格が大きな影響を受けました。

(※注)「訪日外客数」とは、法務省集計による出入国管理統計に基づき、日本政府観光局(JNTO)が算出したものである。訪日外客は、外国人正規入国者から、日本を主たる居住国とする永住者等の外国人を除き、これに外国人一時上陸客等を加えた入国外国人旅行者のことである。駐在員やその家族、留学生等の入国者・再入国者は訪日外客に含まれる。なお、上記の訪日外客には、乗員は含まれない。

出典：日本政府観光局(JNTO)「年別 訪日外客数、出国日本人数の推移」

図 1 2 - 2 首都圏：和牛チルド「4」部分肉セット月次価格と月間訪日外客数との相関

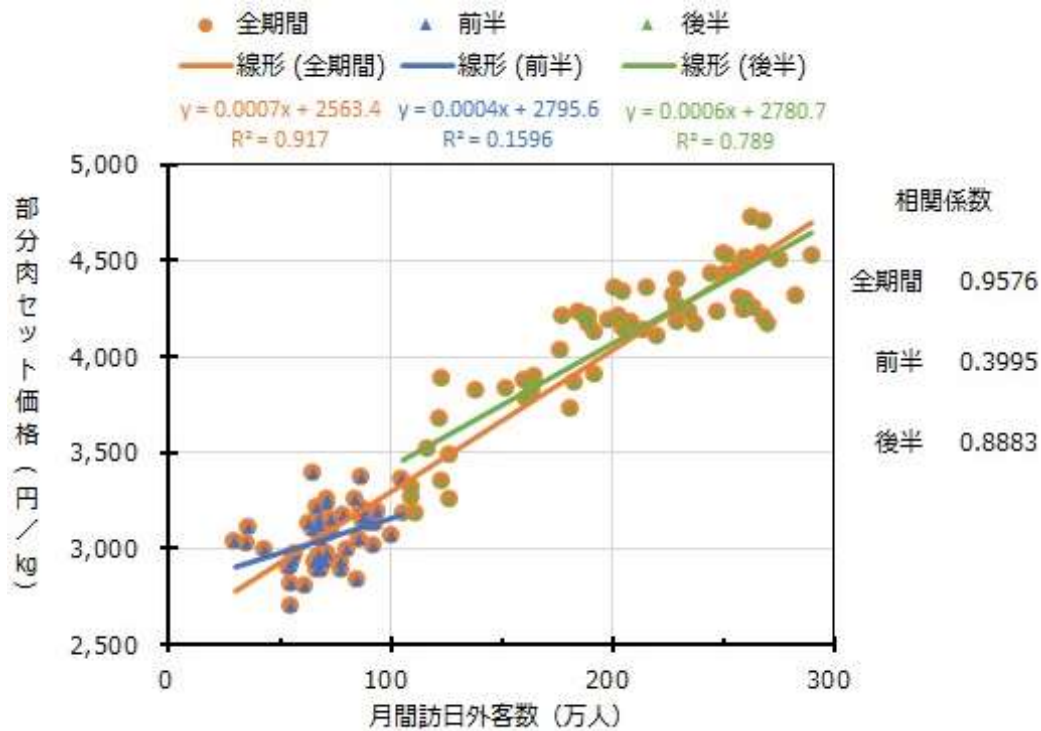
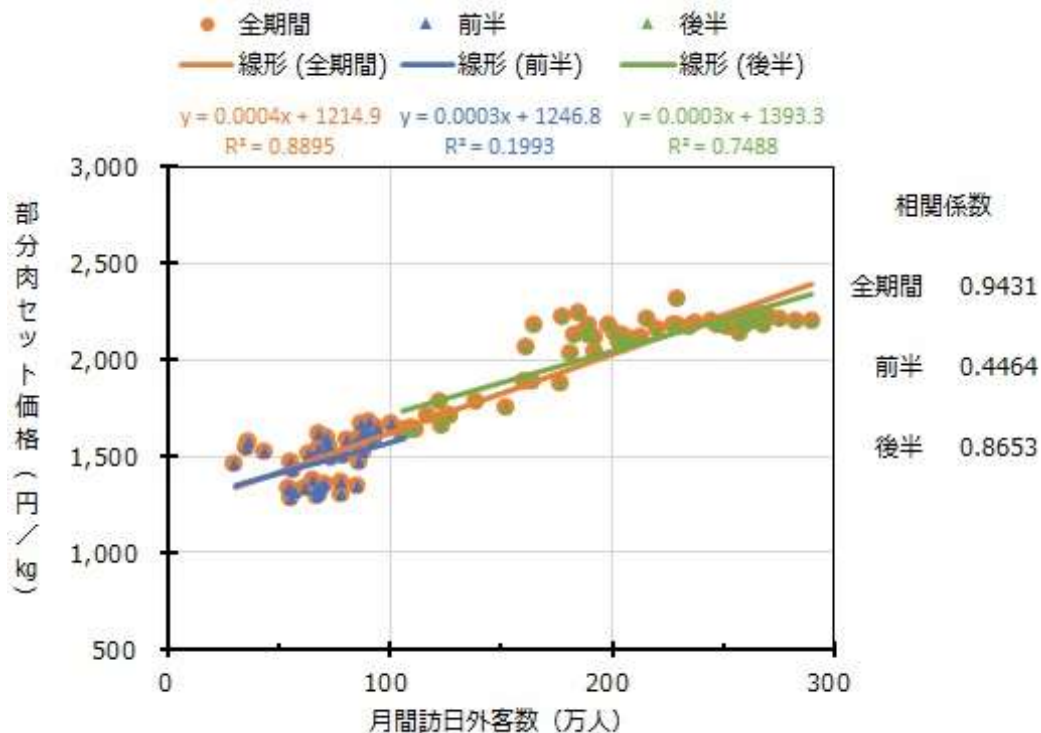


図 1 2 - 3 首都圏：乳牛チルド「2」部分肉セット月次価格と月間訪日外客数との相関



2 訪日外国人の訪日旅行に対する意識調査について

観光庁が行っている「訪日外国人消費動向調査」より、「訪日旅行に関する意識」に関して、2015年及び2019年について、一部抜粋し、まとめました。

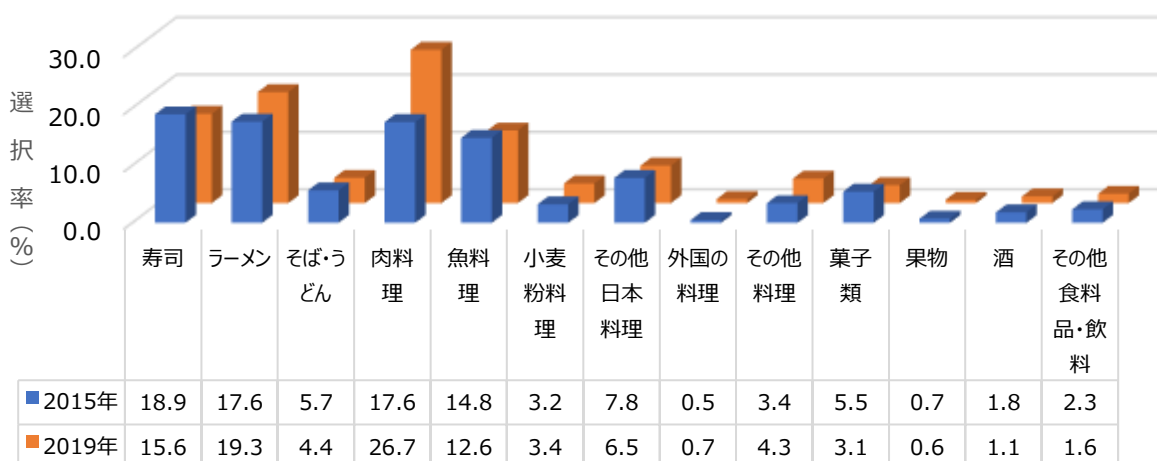
表6-1 2015年及び2019年の「訪日旅行に関する意識」(選択率%)の比較

調査項目	回答	2015年	2019年
1 訪日前に期待していたこと(複数回答)	・日本食を食べること	69.7 (1位)	69.7 (1位)
2 訪日前に最も期待していたこと(単一回答)	・日本食を食べること	26.0 (1位)	27.6 (1位)
3 次回したいこと(複数回答)	・日本食を食べること	59.3 (1位)	57.6 (1位)
4 一番満足した飲食(自由回答)	・肉料理	17.6 (2位)	26.7 (1位)

資料：観光庁「訪日外国人消費動向調査」参考3 国籍・地域(21区分)別 訪日旅行に関する意識

表6-1の調査項目4「一番満足した飲食(自由回答)」について、訪日外国人が回答したアンケート結果による詳細は、次の図13のようになりました。

図13 2015年及び2019年における「一番満足した飲食(自由回答：選択率%)」の比較



資料：観光庁「訪日外国人消費動向調査」参考3 国籍・地域(21区分)別 訪日旅行に関する意識

訪日外国人が「一番満足した飲食」については、2015年では、首位が「寿司」、次が「ラーメン」と「肉料理」でしたが、2019年では「肉料理」が27%の首位で、2位の16%の「寿司」とは差が大きくなりました。また、以下の表6-2より、一人当たりの滞在日数が短くなった中で飲食費支出額が増加しており、より高価なものを飲食するようになっています。

このことから、訪日外国人数が増加してきたことで、高価な肉料理の需要が高まっていた中、インバウンドの激減により、食肉に対する需要が影響を受けたとみられます。

一部の高級焼き肉店では、外国人観光客がいなくなり売上が激減したと、業界関係者から聴取しました。

表6-2 2015年及び2019年における「訪日外国人消費動向調査」(人、円)の比較

「訪日外国人消費動向調査」	2015年	2019年
年間の訪日外客数	1,974万人	3,188万人
訪日外国人年間推定飲食費支出額	6433億円	1兆397億円
平均泊数(一人当たり)	10.2日	8.8日
日本滞在中の飲食費(購入者単価)	31,397円	32,136円

資料：観光庁「訪日外国人消費動向調査」より抜粋